第7回NITS大賞
事例集

令和6年3月

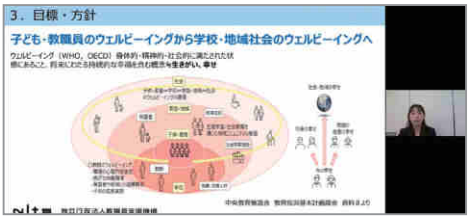
これまでの歩みで、
これからを照らす

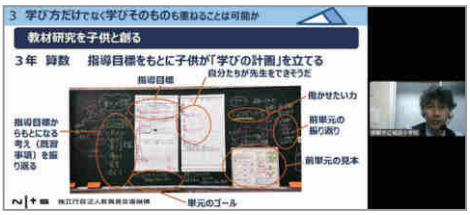
National Institute for
School Teachers
and Staff Development

大賞

第8回NITS大賞の
募集要項は裏表紙へ

令和5年度表彰事業（第7回 NITS大賞）実施概要





二次審査ではオンラインによる
プレゼンテーション審査を実施しました

目　的

「NITS大賞」は、独立行政法人教職員支援機構（NITS・ニッツ）が、学校をとりまく課題の解決に向けてチーム学校で実践した取組を広く募集し、表彰・公開することにより、教育の現場に優れた取組を普及していく事業です。主題を「子供一人一人が輝ける場となるように～教師の働きがいを再構築する学校づくり～」とし、子供たちを主語にするために、教職員が主語となり、教職員、児童生徒、保護者、地域の方々などの多様な人々との協働を含め、のびのびと楽しく誇りを持って学校改善に取り組んだ教育実践を募集しました。学校を挙げて課題に向き合い、改善していく様子を通して、教職員の思いや直向きさを広く伝えることで、全国の学校現場における更なる相乗効果を図ります。

募集要項

エントリー要件　新学習指導要領の着実な実施、学校における業務改善への取組、ポストコロナ時代の新たな学びの実現、特色ある学校づくりなど、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現に向けて、多様な人々との協働を含め、のびのびと楽しく誇りをもって学校改善に取り組んだ実践活動
※令和5年度または同年度を含む期間に取り組んだ実践活動を対象とします。
※取組の事実や結果だけでなく、その過程の中で、困難をどう乗り越えたのか、どうやって周りと協働していったのか、といった点について、特に焦点を当てて記載していただきます。

エントリー資格　「エントリー要件」に示す実践活動に主体的に参画した個人または団体
（教職員、児童生徒、保護者、地域の方（学校運営協議会を含む）、及びその関係団体）

審査の観点（3観点）
1. 学校や児童生徒の現状を把握し、現状を踏まえた課題の解決に向けて目標を設定した取組を行い、その取組が学校の改善に繋がり、教職員や児童生徒にポジティブな影響をもたらしている
2. 広く波及効果が期待でき、同様の課題を抱えた学校が、取組の方法や内容、工夫点などを参考にできる
3. 取組の過程の中で、周りと協働して困難に対処し、試行錯誤を繰り返しながら改善に向かっている

応募数 81点

一次審査　エントリーシートによる書類審査

二次審査　プレゼンテーション審査

大賞1点、準大賞2点、優秀賞4点、入選3点を選出

全体講評

※五十音順、敬称略

審査委員長　国士舘大学 教授　北神正行

受賞された全ての学校では、教職員、児童生徒、保護者、地域の方々との協働を重視し、組織的に課題に向き合っていました。学校の課題を的確に把握し、明確なビジョンと戦略のもとでの未来を見据えた実践が目立っていたように感じます。子供たちと共に新たな学びを創り出そうという意欲的な姿勢や、地域との連携を強化し豊かな学びの機会を提供するといった取組は他校にも大きな示唆を与えるものでありました。全ての受賞校の皆様、誠におめでとうございます。今後もその取組をさらに広げ深め、学校の発展に貢献していただけることを期待しています。

認定NPO法人カタリバ 代表理事　今村久美

今回のNITS大賞に携わる中で、多くの学びがありました。中央教育審議会や学習指導要領等で次々に示される「新しい言葉」が忙しい教育現場でどのように捉えられているのか不安でしたが、「部活の地域移行」や「ウェルビーイング」等のキーワードは言葉だけが踊っていることはなく、実践と共にしっかりと語られていると感じました。新しい言葉を現場でどのように実践に繋げるか、また現場から上がってきた言葉が制度や政策にどのように反映されていくかといったサイクルの中で相乗効果が生まれているかもしれません。

千葉大学 教授　貞広斎子

ここ数年で受賞校の取り組みに変化を感じています。1つ目は、働きがいと働きやすさを両立させながら、限られた資源の効果的な活用で教育効果の向上を目指すという考え方がより明確になったことです。今年度の受賞校はこの点を強く意識していると感じました。2つ目は、子供や先生、保護者、地域によるチームの思考がより一層強まったことです。これらの取組は地域の力にもよりますが、他の学校や地域に広がっていくことを期待しています。先生方の教えと想像力、そしてその知恵を実装したご尽力に感謝いたします。

日本放送協会松山放送局 副局長（元解説委員）　二宮徹

今年度は、スローガンを掲げ、それに向かって多くの人々を巻き込みながら実践を進める学校が多く見られました。このように戦略的に挑戦する、挑戦できる土壌が学校現場に浸透してきていると感じます。特に受賞校の取り組みは、これまでの伝統的な枠組にとらわれず、未来に向けて大胆に挑戦したものでした。この成果が全国の学校にもっと広がってほしいと思いますので、視察や質問を積極的に受け入れてほしいと思います。NITS大賞の審査を通して、日本の教育は地域などとの協働を通じて、これからも頑張れる、より良くなれると確信しました。応募したすべての学校や関係者の皆様に感謝申し上げます。

芸術文化観光専門職大学 学長　平田オリザ

今年度は、ウェルビーイング等の理念が先行している取組が多くあったように思います。学校観の転換が叫ばれる中で、これまでのように実践を積み上げるだけではなく、斬新な発想が必要ではないでしょうか。どの学校も試行錯誤を繰り返しながら挑戦を続けております。これまでの実践を継続することに困難が生ずるかもしれませんが、これからも、生徒と教員が共に学びの新しい共同体を作っていくという視点を大事にしていただければと思います。受賞された皆さん、おめでとうございました。

総合地球環境学研究所 所長　山極壽一

学校は地域のコミュニティの核として、地域を巻き込んで教育活動を展開していくことが重要です。そして、学校は子供たちのための場所に収まらず、子供という未来の資産を高めていくために地域の人々が協力する場所になってきています。そういったことを考えると、今回受賞された皆さんは大変な努力をされ、同時に新しい世界の入り口に立っておられると感じました。受賞をきっかけに全国の学校のモデルとなり、それぞれの工夫とデザインを駆使して、先駆的な教育に挑んでいただきたいと思います。

主催者から

独立行政法人教職員支援機構 理事長　荒瀬克己

今回もまた、「子どもは有能な学び手である」ということを実感しました。その力を無理なく引き出しておられる教職員のみなさんのすてきなお姿を拝見しました。学校が楽しく面白いところとなるためには、豊かな学びの場となるためには、子どもと教職員、子ども同士、教職員同士、学校内外の協働が欠かせません。そこには温かい信頼関係で結ばれている人がいて、学び合い、支え合いがあります。ご紹介いただいた実践が学校教育に携わる全国の方々に共有されて、各地でのさまざまな工夫につながったり、誠実な取組の応援になったりすることを確信しております。ありがとうございました。

大賞の発表

第7回NITS大賞は、学校現場等から81点の応募がありました。
今年度は大賞1点、準大賞2点、優秀賞4点、入選3点が選出されました。
※以下、掲載順は賞ごとにエントリー番号順となっています。

令和５年度表彰事業（第７回NITS大賞）
大 賞

生徒が輝くブカツイノベーション
～生徒自らがデザインする放課後活動の創造～

新潟市立白新中学校

活動概要

部活動地域移行に関する議論が教職員の働き方改革に偏り、改革の本来の目的を見失う可能性がある。部活動の形をそのまま地域に移行するのではなく、生徒が生涯にわたりスポーツ・文化活動に取り組める持続可能な環境を構築することである。そのために、生徒が主体となり放課後をデザインする、学校発「地域協働ブカツイノベーション」を行った。

アピールポイント

生徒を中心に据え、放課後活動を「時間と空間と仲間」の志向別モデルを導入し、多様な活動を提供した。生徒が興味に応じて楽しめる環境を整え、自己成長と交流を促進した。これにより、生徒が放課後を自らデザインすることができ、学校全体の活力が向上した。

評価点

部活動改革において、放課後活動の創出という新たな視点から取り組む姿勢が高く評価できる。さらに、学校運営協議会を活用し、生徒の意向に寄り添いながら部活動の地域移行を進める好事例である。特に白新ユナイテッドは生徒が自主的に放課後をデザインする新しい試みであり、全国の学校で参考になると思われる。今後を見守りたい。

令和５年度表彰事業（第７回NITS大賞）

準 大 賞

ウェルビーイングな学校づくり ～子ども・学校・地域社会が協働する実践から～

京都市立北総合支援学校研究推進委員会

活動概要

教員一人一人が、子ども・教員・地域社会の「ウェルビーイング」を描き、その実現に向けた地域協働の教育実践と学校改善を進めた。社会と協働することで、子どもの学びはより生きた力となり、社会の障害理解が促進される。子ども⇔教員⇔学校⇔地域社会の幸せの好循環を生む「ウェルビーイングな学校」を目指し、働きたい環境づくりを進めた。

アピールポイント

全教職員が一人一実践（全105事例）に取り組むことで、子どものウェルビーイングに迫る授業づくりと社会協働の学びが広がった。教員のウェルビーイングを自分ごととして考えることで、心身の充実や働きがいへの意識が高まり、超過勤務時間も減少している。

評価点

個人レベルから課題に取り組み、全教職員が実践を通じて学校力向上に貢献している姿勢が高く評価できる。その研究・実践方法は汎用性があり、教員全体の意識を高め、年間105の実践を展開する努力は賞賛に値する。ウェルビーイング概念の共有と取組は評価できるものであるが、まだ始まったばかりであり、生徒の反応を見守っていく必要がある。

子供と共に学び創る ～「城岳小学校学びの相似形」の構築～

那覇市立城岳小学校

活動概要

「子供と共に学びを創る」ことについて、城岳小学校なりの「学びの相似形」の構築に向け、「学び」そのものを重ねる相似形とすることにチャレンジした。子供たちと教材研究をしたり、子供たちが授業をしたり、授業研究会では、参観した教師と子供たちで授業リフレクションをしたり、「学び方」だけでなく「学び」そのものを協働探究した。

アピールポイント

「子供と共に学びを創ることは可能か」という問いに、試行錯誤を繰り返すプロセスに教師と子供がAgencyを発揮する姿があった。授業リフレクションで「私たちの学びは…」と語り出す子供と「なるほど…」と耳を傾け対話する教師の姿の先に共創する学びがみえた。

評価点

子供と教師の学びの転換に挑戦し、独自の取組を行ったことが高く評価できる。子供と教員の学びを相似形とする発想を授業改善や学校運営に活かしたアプローチは素晴らしい。リフレクションなどの地道な努力が取組の支えとなっており、特に「じょうがくタイム」が「子供と共に創る学び」に効果を発揮している。また、異学年の学びも良い成果をもたらしている。

令和５年度表彰事業（第７回NITS大賞）
優 秀 賞

事務職員の主体的な校務運営参画 ～学校運営協議会と共に創る「チーム学校」～

伊丹市立摂陽小学校　大嵩 貴史

活動概要

教職員等中央研修で事務職員は「学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職」である自覚をもって「マネジメント機能」を発揮することが求められることを学んだ。そこで、自らの専門性を校務運営に資するために学校運営協議会に参加し、児童の課題を解決するためにマネジメント機能を発揮して地域・保護者・行政と学校の橋渡しを行った。

アピールポイント

学校教育法の改訂により、事務職員の職務規定は「従事する」から「つかさどる」へと変更された。事務職員が学校運営に主体的に参加すると、「人と人、人とものをつなぐ取組」が迅速に円滑に進められ、児童の利益に繋がるという汎用性ある実践例を明示できた。

評価点

事務職員が学校運営協議会に積極的に関わり、マネジメントを通してサポートを充実させるモデルとして全国の参考になる取組である。事務職員が学校マネジメントに主体的に参加することで、学校全体の活力が増加している。自校の課題を整理し、学校運営協議会への参画を通じた取組は汎用性が高い。これらの取組を支えた校長のリーダーシップも評価できる。

ハッピーフィード大作戦!! ～若手教員!いいところ見つけで教師力アップ～

厚木市立毛利台小学校　髙橋 亮太

活動概要

「ハッピーフィードバック大作戦!!」と名付けた児童の「いいところ見つけ」を触媒に、学年団内で学年主任が若手教師のALACTモデルの振り返りを適切にファシリテートし、若手教師の成長を支える取組である。研修・実践・児童アセスメント・教師の行動変容確認までを大きなサイクルとして捉え、児童・教師が成長することを目指した実践である。

アピールポイント

「教師教育」の研究では、若手教師が子どもを見取る際、「見取りの観点」の数が少ないことが指摘されている。若手教師の教師力アップという人材育成を、学年団内で日常的・継続的に、勤務時間内で実施できる取組として本実践を提案したい。

評価点

子どもの良さを見つける取組を中心に、若手教員の育成に組織的なケア・支援を提供する仕組みが評価できる。「いいところみつけ」は若手教員の育成だけでなく、子どもたちにも良い影響を与えている。また、地道な継続を重視した10分対話などは学校以外の場でも有効である。若手教員を対象としたハッピーフィードバックの取組は学校全体を活性化させている。

デジタル・シティズンシップの醸成 ～学校全体の対話によるガイドラインの創造～

那覇市立城北中学校

活動概要

本実践は「1人1台端末」の課題を生徒が自治的に解決していく過程で、学校全体のデジタル・シティズンシップを育んでいく取組である。その際、教員はファシリテーターとして生徒の主体的な活動を組織的に支援していく。エントリーシートには中学校で行った実践が記載されているが、他校種でも実践可能である。

アピールポイント

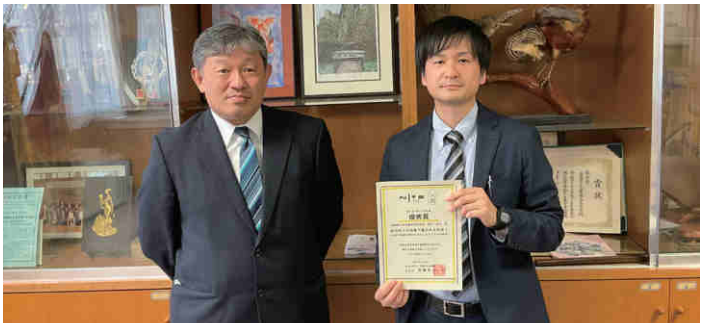
実践を行う際の留意点を示したマニュアルを別途作成している。マニュアルには、実践で使用した教材へのリンクも掲載されている。忙しい先生方でも、すぐに活用できるつくりとなっているため、是非ともご利用頂きたい。
（検索ワード:策定支援マニュアル）

評価点

課題設定から実行に移すプロセスが明確であり、教師と生徒が協働で課題に取り組んでいる点が評価できる。一人一台端末の課題に正面から向き合った教師の姿勢と導きが生徒の自主性を引き出し、学習や生活態度へ好影響を与えることが期待できる。また、デジタル社会の課題に生徒の自治によって取り組むことに成功している。

校内外との協働で魅力ある学校へ ～学科や地域の特色を活かしたカリマネの実践～

宮城県小牛田農林高等学校　鈴木 崇之



活動概要

本校は創立136年を迎える伝統校である。学校周辺に広がる世界農業遺産や、二学科併設の学科構成など、多様な教育資源があることが特色である。本取組では、これらの教育資源を効果的に結びつけることで、学校の魅力を深めていくことを目指した。具体的には、「総合学科内」「学科間」「学校と地域」の大きく三つの観点にわけて取組を進めた。

アピールポイント

業務過多が叫ばれる教育現場で新たな取組を行う際には、日頃の業務との折り合いや負担感を緩和していくことが肝要と考える。本取組ではビジョンの共有や働き方改革の視点を大切にすることで、高い協働意識をもって進めていくことができた。

評価点

自校の特色（課題）に着目し、3つの協働によって学校課題の解決と新たな学校づくりを進める取組が評価できる。総合学科の多様さを活かす発想と工夫が探究活動や地域との協働にまで発展したモデル的な取組に好感が持てる。ファシリテーター＋アドバイザー制が効果的に機能している。

令和５年度表彰事業（第７回NITS大賞）
入 選

地域とのつながりの中で幼児が育つ ～地域連携の見直しと工夫～

愛媛県砥部町立麻生幼稚園

活動概要

幼児の体験を豊かにし、地域とのつながりの中で幼児の育ちを支えたるための実践を行った。地域に幼稚園の取組を知ってもらうために、園便りを発信し感想をいただくとともに、協力隊になってもらった。また地域との交流が一過性のもの、イベント的なもので終わらないよう、交流の前後の関わりも大切にしながら、見直しと工夫を行った。

アピールポイント

不安を抱きながら障害がある方との交流を始めた。幼児の予想外の言動に教師が戸惑ったが、職員同士の話し合いと交流を重ねた結果、親しみがわき、相手を理解しようとする幼児の心の育ちにつながった。地域の方の温かい声は、教師自身の喜びや意欲となった。

評価点

園の課題を的確に捉え、園児の豊かな成長を願って様々な手立てに取り組んでおり、特に地域の特性に着目して地域との協働を進める取組が評価できる。障がい者や地域との交流・発信を進めることは地道な努力が必要で、継続して心の豊かな子どもを育てていることに敬意を表したい。幼児の自発的な行為を引き出すことにも成功している。

ウェルビーイングの根っこを育てる ～「3つの価値」を中心にした学校づくり～

市立札幌豊明高等支援学校

活動概要

本校が考えるウェルビーイングは、個性豊かな生徒たちが、卒業後も自分の人生を「より良く生きようとする」姿である。全教職員を対象にしたアンケートから整理した、豊明が大切にしたい「3つの価値」を教職員、生徒、保護者、関係者と共有する取組みを通して、ウェルビーイングの「根っこ」を育てるカリキュラムの共創に挑戦している。

アピールポイント

「自分を知り大切にしよう」「まわりの人とつながろう」「経験を力にしよう」という3つの価値を対話で共有してきた。プロアクティブな生徒指導によって生まれた温かい学校風土を土台に、ウェルビーイングの循環を生みながら進化し続ける学校を目指したい。

評価点

スクールミッションの探索から3つの価値への落とし込み、具体的な活動の展開という流れの適格性と、活動における対話への着目は他校の参考になる。グッジョブカードなどの取組が豊かな学びと連携につながり、経験を力にする未来が見える。ウェルビーイングの根っこに当たる3つの取組を実践していることが高く評価できる。

地上の楽園プロジェクト ～みんなで創る。みんなが楽しい学校づくり～

愛知県豊橋市立大清水小学校

活動概要

「教育活動に失敗はなし!あるのは学びだけ!」の意識のもとに,新しいことに挑戦できる風土を作った。主体的な児童会活動・学校行事に繋げた。教師が学びの場を作るために,児童に任せる勇気をもち,自分たちの意見が行事や生活に反映される経験を積むことで,自ら主体的に学校を創ろうという気持ちを,児童と教師が共に高めていく。

アピールポイント

ICT機器を活用した授業への挑戦や,時代に合わせた宿題の取り組み方の実践など,教師が正しいと思う方法で,主体的に教育活動に向かう姿勢を目指した結果,教師だけでなく児童の主体的な活動に繋がったこと。

評価点

教師の意識改革から始まる学校文化の変革が評価できる。全国共通の課題に挑戦し、タブレット端末持ち帰りを通じて児童の自主性を引き出し、自走するまで発展させ、デジタルシティズンシップがうまく生かされている点も評価できる。今後の成果を見守ることで、さらなる発展が期待できる。

応募校の声

毎年応募して、研修内容を確認したり教育実践の振り返りをしています。NITS大賞は研鑽を深める良い機会の一つとしてとらえています。

NITS大賞への応募を通して、生徒や職員の自信や自己肯定感の向上に繋げたいです。

教育は大きな転換期を迎えています。先生方、学校のさまざまな取組を広く発信していってほしいです。

現場レベルでの発想豊かなアイデアを知る貴重な機会だと思っています。

受賞校のエントリーシートやプレゼン等がたいへん勉強になりました。

NITS大賞があることで、他校の実践を知ることができるいい機会を得られています。多くの実践や研修での学びをもとに、自校の実態に合う実践を求めることができました。

全国から81点の応募がありました

これからも全国の様々な校種の実践事例を紹介していただき、児童生徒の可能性を引き出す先生方の後押しをしてもらえたらと思います。

自校での取組を、こうした機会に他校種の先生方に認知してもらえるとうれしいです。

様々な学校の先進的な取組を知ることが一番期待することです。学校経営に携わり、本大賞に応募することを一つの目安にしてきました。これからも楽しみにしています。

毎年様々な取組を知ることができ、大変参考になります。また、年々取組のレベルが高くなっており、刺激を受けています。

好事例の普及、教職員の働き方改革、子どもたちの学びの広がりに繋がればと期待しています。

※写真は受賞当時のものを掲載しています。

岡山県真庭市立勝山小学校

コロナ禍を逆手に変心、変身、変新～教育課程の工夫と人の繋がりで、働き方改革～

活動概要	学校と保護者・地域との連携がまずく、職員は疲弊し、児童は知・徳・体すべてに大きな課題があった。教育課程の工夫をすることで児童の生活意欲が高まり、学校・保護者・地域が共通の目標意識を持つことで連携が進んだ結果、働き方改革が進み学校課題が大きく改善した。

学校職員が一体となり全員でチームとして取り組むことができたのも大きな成果だと思います

一昔前の勝山小学校は下校バスの時程の関係で児童の下校時刻が遅く、職員の勤務の上で大きな課題がありましたが、教育課程の工夫で大きく改善されました。それにより職員にゆとりができました。学校職員が一体となり、共通の教育方針で取り組むことにより、様々な課題に立ち向かうことができました。また課題を1人の教職員で抱え込むことなく、教職員全員でチームとして取り組むことができたのも大きな成果だと思います。令和5年度は新たにコミュニティスクールを立ち上げ、保護者や地域の方々の力をお借りしながら、子どもたちを育てていきたいと思います。

茨城県立下妻第二高等学校

下妻市と連携!シチズンシップ教育 ～生徒と社会をつなぐ探究活動の授業デザイン～

活動概要	「社会とつながる」ことをねらいとしたまちづくり探究活動であり、生徒の社会参画への意識が高まるよう探究授業をデザイン。下妻市との協働により、シチズンシップ・主権者教育を兼ねた各活動、市への政策提言の機会を経て、社会の一員であるという当事者意識の向上を図った。

地域の方々と協働しながら生徒を育む「社会に開かれた学校、開かれた教育」の実現を目指します

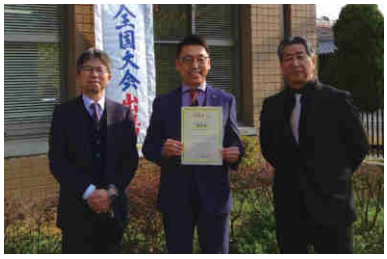
令和4年度1月、本活動のゴールと位置づけた、代表グループによる下妻市への提言発表会が無事に終了しました。生徒のプロポーザルにいただいた市からのフィードバックは大変有意義で、生徒は考案企画を俯瞰して振り返る機会を得られました。また、代表1グループの企画が実現に向けた取り組みを進めています。アンバサダー制度を活用したSNSの改革に挑戦し、若者目線で下妻市の魅力を発信していく活動です。今後も地域の方々と協働しながら生徒を育む「社会に開かれた学校、開かれた教育」の実現を目指していく必要があると思っています。

愛知県立愛知商業高等学校

「ワクワクドキドキが止まらない! ～ビジネスの視点×生き残りをかけた学校経営～」

活動概要	「今までの教育活動は本当に魅力的だろうか」を出発点とし、商業高校ならではの「ビジネスの視点」から、すべての教育活動を見直した。「オフィスカジュアルデー」「スクールグリコ」「キッチンカーの招聘」など、OODAループでトライ&エラーを繰り返し実施した。

新しい取り組みとともに「愛商でしかできない学校生活」をワクワクしながら送っています



全ての教育活動に商業高校ならではの「ビジネスの視点」を取り入れた成果として、生徒・教職員や保護者も「愛商でしかできない学校生活」をワクワクしながら送っています。さらに、中学生向けの学校説明会では、保護者から「自分が高校生に戻って愛知商業に入学したい」という感想を多数いただいています。大人も入学したくなるようなビジネス社会で生きていく力を身に付けることができる教育内容が伝わっていると思います。また、若い世代への情報発信を効果的に行うため全校生徒を部員とした「TikTok同好会」の立ち上げなど、新しい取組も始めています。

大分県別府市立中部中学校

夢をもとう!ドリームスクール!! ～学校・地域・保護者協働で夢や希望を育む取組～

活動概要	学校教育目標の達成と学校課題の解決のために教職員・保護者・地域がゴールを共有し協働して取り組んだ活動である。地域の先生の授業であるドリームスクールを教育課程に位置づけ、地域を巻き込んで生徒の夢を育んだ。保護者は一大イベントとして職業体験学習を企画し運営した。

「地域とつながるドリームスクール」でさらなる取組をすすめます

地域の先生による授業「ドリームスクール」を教育課程に位置付け継続している中で、より地域の教育力を活用するために「地域とつながるドリームスクール」と名付けた2つの取組を計画しました。1つめは、校区に住む地域に根ざした方々（自治会長等）を招き、生徒と交流する授業です。生徒がより地域を感じる授業となりました。2つめは、生徒が企画し地域住民と交流する授業です。生徒の実行委員会が地域の方と「ウェルネス」をテーマにしたワークショップを企画しました。

福島県立相馬支援学校

本当は知りたい!学びたいんです! ～これからの研修スタイル・教師寺子屋～

活動概要	学校現場で「研修」というと、日々の業務にプラスして行うビルド思考の雰囲気があることが多く、教師の多忙化を解消できないという課題があった。これまでの「研修」スタイルを見直し、“個人の学びたい”を保障していくために、「教師寺子屋」や「一人で学べる環境整備」の取組をした。

研修において「新たな教師の学びの姿」を実現できるよう日々模索しています

学校には、様々な年齢・経験の教員がいます。学びのステージも興味関心も様々で、ニーズも多岐に渡り、一方で教員の多忙化解消も課題です。そのため、全ての研修を全員で一斉に行うのではなく、学びのニーズに合わせて、研修の場を提供し、機会の選択ができるようにしています。新年度多くの転入職員を迎え、新しい体制で学校づくりが進んでいます。自由な研修の雰囲気が浸透し、気軽に研修に参加できるため取組当初より参加者は増えています。今後も「個別最適」で「協働的」で「主体的・対話的で深い学び」である「新たな教師の学びの姿」を実現できるよう模索していきます。

神奈川県相模原市立桜台小学校

学びを通して自己肯定感を高める ～一人学習となかよし探究の取組を通して～

活動概要	児童の自己肯定感を高める取組として、①学習のめあてや内容を個々が設定し、自分のペースで取り組む「一人学習」②異学年のグループで年間通して活動する「なかよし探究」を教育課程に位置付けた。自分や友達のよさを実感し、自力で学習を進め自己肯定感の高まりにつながる姿が見えてきた。

「一人学習」と「なかよし探究」は本校の特徴的な取組として進めています。取組の定着と広がりを感じています

令和5年度スタートの着任式で、「本校のいいところは、なかよし探究があることです。」と児童会長が語る場面がありました。「なかよし探究」は子供にとって楽しみで自信をもって語れる活動になってきています。「一人学習」については、学校全体で時間割をある程度統一して行うようにしています。自分に合った学びを確実に進められるよう、時間割上に個別最適の学びの機会を保障しています。本校の特徴的な取組として進めている結果、子供にも活動が定着し、周辺の学校から、問い合わせを受ける機会も増え、取組の広がりを感じています。

受賞校のエントリーシートは次頁から

大 賞	【エントリー名】新潟市立白新中学校 【活動名】生徒が輝くブカツイノベーション ～生徒自らがデザインする放課後活動の創造～

解決すべき課題

部活動の地域移行に関する議論が「教職員の働き方改革」にのみ焦点化されることは、**「誰のための改革か」**という最も本質的な問いを、ともすると見失うことになりはしないか。今の部活動の形をそのまま地域へ移行することがこの改革のゴールでは決してないはずである。

子どもを主語とした学校発の地域協働**ブカツイノベーション**、すなわち子どもたちが生涯にわたりスポーツ・文化活動に自発的に取り組める持続可能な環境づくりこそが改革の焦点である。

ブカツイノベーション	子どもを主語とした部活動改革	生徒がデザインする放課後

目標　生徒自身がやりたいことを自分でデザインすることができる放課後の創造

学校運営協議会とともに、休日の部活動のみならず、平日を含めた部活動改革「ブカツイノベーション」を実現し、生徒の可能性を最大限に伸長することが出来る放課後環境を創造する。

方針　平日の活動も含め、学校と地域が役割を分担しながらより良い環境を新たに構築する

- 17 時までは、学校が担うべき役割として、「どんなことも・誰とでも・気軽に」スポーツや文化活動に取り組み、かつ生徒自身が考え企画し運営することができる環境を構築する。
- 17 時以降は、地域が主導となり、学校施設を使いながら、「レベルアップ」「トップ」志向のクラブによるスポーツ・文化に取り組むことが出来る持続可能で質の高い環境を構築する。

活動内容

部活動改革前の白新中学校の部活動の現状（令和４年度）は、全生徒の 87.5%が部活動に加入し、その内運動部 58.5%、文化部 29.0%所属していた。部活動に費やした時間は、平日・休日・長期休業中を合わせると**約 450 時間**行われていることが分かった。これは、**教育課程年間標準授業時数（1015 時間）の 45%にあたる時間**である。そもそも部活動は、教育課程外の教育活動である。そして、希望入部制であることから、全員を対象とした教育活動でもない。また、少子化による部活動種目の精選により多様なニーズに応えられる活動を準備できないことや、同じ部活動内にもエンジョイ層から競技志向層が混在していることの問題（図１）もあり、部活動の形をそのまま地域に移行したとしても解決すべき課題の本質的解決に至ることはない。

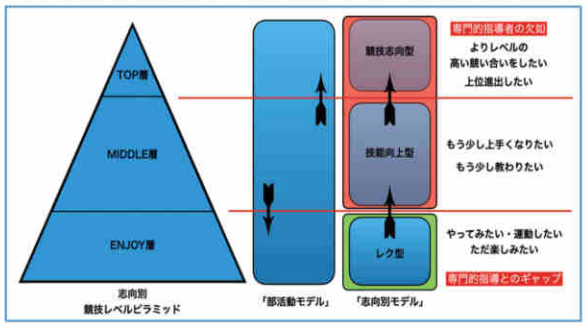


図１志向別競技レベルピラミッドモデル

そこで、大前提となる学校基本方針を、

1　現状の部活動を移行する考え方をしない
2　平日の活動も含めて部活動改革を行う
3　地域の協力を得て、学校と地域で役割分担をする

→ **生徒が主体となって放課後をデザインする姿へ**

と設定し、これら基本方針を踏まえ、令和４年度学校運営協議会において，部活動改革についての方針説明を行い、「子どもたちの放課後をデザインし直すことを通して、子どもたちが放課後をデザインし直すことができる」持続可能な環境づくりをビジョンとして共有し、承認を得た。運動部・文化部ともに、そして休日だけでなく平日を含め、多様なスポーツ・文化活動に気軽に取り組むことができる生徒主体のエンジョイ層、地域の協力を得ながら、専門的な指導を受けることができるレベルアップ・トップ層の活動ができる志向別モデルを構築した。

取組の過程

17時までの活動を「放課後デザイナー活動」と称し、週２回１時間の「生徒が主体となって企画運営するスポーツ・文化活動」を行える環境を整備（図２）した。「放課後デザイナー活動」は、１年間を３期に分け、生徒自らが企画提案した内容に興味を抱いた生徒が集い、自主的に活動を行うものである。今年度は、ドッヂボール・バドミントン・フットサル・卓球・ソフトテニス・バスケットボールの球技の他、ギター・音楽・イラスト・けん玉・科学クラブ・写真・イベント企画活動が発足した。各期に行いたい「放課後デザイナー活動」をとりまとめリードする「放課後デザイナー×デザイナー」が生徒の発案により発足し、活動をさらに盛り上げるための企画会議を行った。活動に参加した生徒に対し形成的評価を行った結果、①「楽しむ（情位目標）」、②「できる（技能目標）」、③「わかる（学び方＋認識目標）」、④「かかわる（社会的行動目標）」のうち、①「楽しむ（情位目標）」、④「かかわる（社会的行動目標）」ことに生徒の満足度が高いことが確認できた。

図２　令和５年度からの校時表と放課後活動

17時以降は、学校長を代表とする「白新ユナイテッド」なる組織を学校運営協議会内に設置（図３）し、同協議会から活動方針および内容の審査を受け、承認・委託を受けた地域クラブが学校施設を利用し活動を行う。今年度は、バスケットボール・サッカー・ソフトテニス・野球・音楽のスポーツ・文化クラブ５種８クラブが認可された。魅力ある運営に向け複数回の研修会を実施し、サッカークラブは県中体連認可地域クラブとして、中体連大会に出場した。また、バスケットボールにおいては競技力・志向別のクラブが設立され、同じ種目であっても技能向上を目指すミドル層クラブの他、大会への上位進出を目指すトップ層のクラブなど、生徒の多様なニーズに合わせた活動が展開されている。

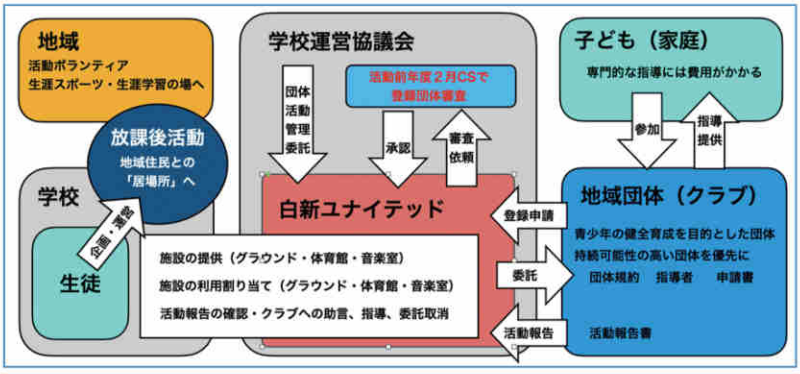


図３　学校運営協議会と地域クラブとの関係

また、自校生徒のみならず他校の小・中学生が地域クラブに参加するなど、従来部活動の枠ではできない多様なニーズに沿う「地域に開かれたスポーツ・文化活動」が展開されている。

活動の成果：

「放課後デザイナー活動」において、様々な活動が企画されるが、まだまだ充実した活動にはなり得ていない。しかし、新しいことを始める時こそ、課題を成果として捉えることに、この活動への可能性が秘められている。

「白新ユナイテッド」では、部活動地域移行に向けた取組実践を、改革パッケージ（図４）として提案し、他校での取組に汎化できるよう積極的な情報提供を行っている。

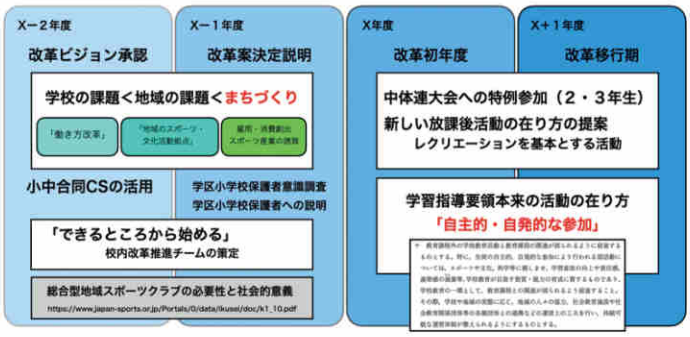


図４　学校発の部活動改革パッケージ案

「時間」と「空間」と「仲間」の三つの「間」で、「志向別モデル」を推進する学校発の地域協働ブカツイノベーションは、子どもたちの生涯にわたるスポーツや文化活動に親しむ態度を育み、将来的にはこれを支える地域の魅力向上、つまりは「まちづくり」にもつながるものである。

準大賞

【エントリー名】京都市立北総合支援学校　研究推進委員会

【活動名】ウェルビーイングな学校づくり
～子ども・学校・地域社会が協働する実践から～

解決すべき課題：

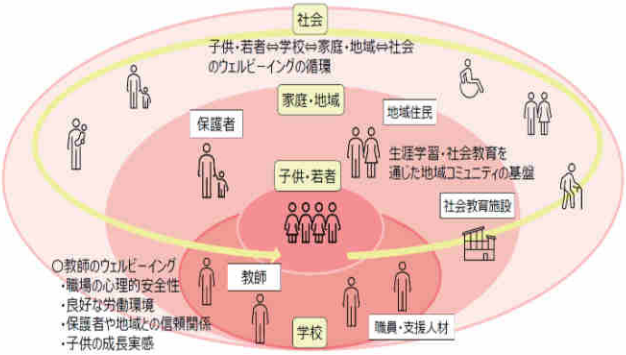
○今後の予測困難な時代において、子ども・教員・地域社会の「ウェルビーイング向上」が重要

○子どもたちが地域社会で豊かに生活するために、社会の障害理解を広げ、共生社会の形成を積極的に推進する役割が、本校（特別支援学校）にはある

○「学校の働き方改革」が推進される中、業務の効率化を図りつつ、教員自身も多様な働き方や生きがいを認め合える「ウェルビーイングな学校」を作る

目標・方針：

教員一人一人が、子ども・教員・地域社会の「ウェルビーイング」を描くことから始め、その実現に向けて、地域協働の授業実践と学校改善を進めていく。地域交流や社会資源の活用を増やすことで、子どもの学びはより生きた力となり、社会の障害理解を促すことになる。子ども⇔教員⇔学校⇔地域社会の幸せの好循環を目指す。



中央教育審議会　教育振興基本計画部会　資料８

活動内容：

① **『あなた（北総合）の望む未来（Future we want）を描くことから始めよう』**

【子ども】【教員】の「ウェルビーイング」に向けて、Ⅰ必要だと思うこと、Ⅱ【地域社会】に望むこと Ⅲ学校で取り組めることについて、全教員を対象にアンケートを実施した。

② **【子ども】の「ウェルビーイング」に向けて、必要な力・学びをデザインしよう**

アンケート結果から、小中高それぞれの学部で出た意見をカテゴリー分けし、少人数の研究グループを編成した。コミュニケーション指導・地域協働・ICT 活用など、一人一実践、研究計画を立てて取り組む。

③ **【教員】の「ウェルビーイング」に向けて、働き方改革に取り組もう**

教員の「ウェルビーイング」に関するアンケート結果から、支援部教員が一人一つ学校改善に取り組む。

※月１回、研究日を設定し、プレゼンや協議を実施した

※「教育政策におけるウェルビーイング（内田由紀子先生）」や「ICT 活用」の研修を実施

取組の過程：

○北総合の目指す「ウェルビーイング」の共通理解

学校全体として（120 名の教員が回答）、【子ども】【教員】【地域社会】の「ウェルビーイング」についてどのように考えているか、アンケートの結果を視覚化して共有した。全校共通の思いや、学部ごとの特色などを共通理解するとともに、多様な考え方があることを周知できた。

【子ども】【教員】の「ウェルビーイング」に向けて学校でできそうなこと（小中学部/全校）

アンケート結果から！ 小学部・中学部の先生方が
「子どものウェルビーイングに向けて」学校でできそう！と思うこと

小学部

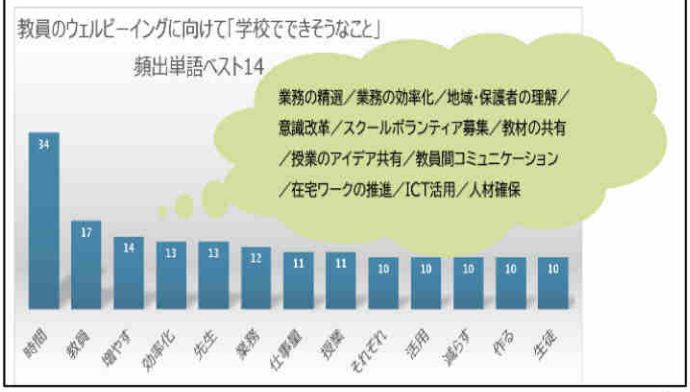
【Formsの回答より】
- 小学校、企業、団体との交流学習・理解啓発
- 地域の施設活用、地域の人との交流
- 安全な遊び場所、楽しめる場所・施設利用
- ICTを活用したリモートや様々な授業、
- 校内での学部間交流、集団での遊びの指導
- コミュニケーション方法の獲得（ICTも含）
- 自分の思いを伝える
- 実生活を見据えた活動、体験活動の充実
- 教材・環境づくり、授業づくり、専門性向上

中学部

【Formsの回答より】
- 地域と交流する授業・活動
- 学校開放、イベント発信
- コミュニケーションツール、ICT活用
- 社会に必要な力を身に付ける
- 教材づくり、環境作づくり、専門性向上

＜全学部に共通する内容＞
地域社会資源活用・情報発信
交流・コミュニケーション・ICT・教材環境作り

アンケート結果から！ 全校の先生方が
「教員自身のウェルビーイングに向けて」学校でできそう！と思うこと



○一人一実践に取り組む【計画→実践→協議→中間プレゼン→改善→12 月実践発表交流会！】

全教員が、「ウェルビーイング」に向けた目標を設定し、今年度の到達目標と具体的な計画を立て、実践を進めた。取組内容が共通する研究メンバーで、指導支援や環境の工夫、地域連携の授業づくりなどを模索し、子どもの「ウェルビーイング」を広げる、社会協働の学びを実践していった。教員が主体的に楽しく取組を進められるよう、アウトプット型の協議を工夫。

学校改善の取組は、「業務効率化」「教材サポート」「教員の専門性向上」「教員のリフレッシュ」が進められた。

中間報告会の実践プレゼン

ＳＣのミニ学習会「漸進的筋弛緩法」

事務作業の効率化に向けた「ICT 小ネタ集（困り＆テクニック集）」の発信や、ICT 教材作成ワークショップなど、教員のニーズから多数の取組が実施された。（↓実践例）

- 教材共有ツールの作成・活用
- ICT 活用の効率化情報発信
- 教員用ストレッチ動画の作成
- 外部資源活用先リストの作成
- 学校業務精選とマニュアル化
- 教員のメンタルサポート充実
- LD 通級、視機能、言語聴覚指導に関するミニ研修（３分動画）

活動の成果：

○地域交流や社会資源の活用が激増→「本物の体験・社会との関わりの充実」と「理解推進」

年間で 105 事例の実践が進められ、その中でも、地域の小中高等学校・盲学校・大学・地域住民との交流、企業団体等の出前授業、芸術文化体験等の施設利用など、地域社会と関わる取組が、**62 事例実践された**。「社会の中で本物に触れて学んで欲しい」という教員の声から、積極的に地域との連携が進められた。活動の場が広がり、地域社会の様々な人と関わることで、子どもたちの素敵な面や苦手なこと、本校の取組についても，知ってもらう機会が増えた。

大学での自校製品の販売

○職員室で「ウェルビーイング」というワードが出る！→教員が「働き方」「良い状態」を意識

超過勤務時間が、一人当たり月平均２時間減！（前年度比）「ウェルビーイング」という言葉が、職員室で聞かれるようになり、自身の働き方やワーク・ライフバランスなどに目を向ける雰囲気が出てきた。それが「働き過ぎの自覚」や「個人の業務精選」などにもつながり、「教員自身のウェルビーイングを考えられる学校」へと、全体の意識が変革してきている意義は大きい。**今後は、教員の「ウェルビーイング」に向けても、地域と協働した実践をさらに広げていきたい！**

準大賞

【エントリー名】那覇市立城岳小学校

【活動名】子供と共に学びを創る
「城岳小学校学びの相似形」の構築

解決すべき課題：Agency が発揮され well-being を目指す「観」の転換

「子供を主語に」って学校教育で実現できるのか

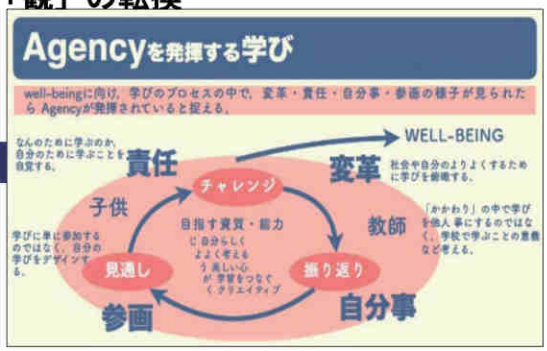
「子供を主語にする」など「観」の転換はいいが、
子供にすべてを委ねていいのか

「不確実な時代」を受け入れ、自分らしい学びを

VUCA な時代に正解が一つではない学びとは

自己肯定感の高さなど活かした学びとは

誰かのために行動したり、ボランティア活動など
「利他の心」がある子供たちに合った学び方とは



well-being に向けて Agwncy を発揮し、人生を歩む芯をもつ者へ

目標・方針：「子供と共に創る学び」とは

子供も教師も Agency が発揮しよりよい学校を創る環境づくりの推進

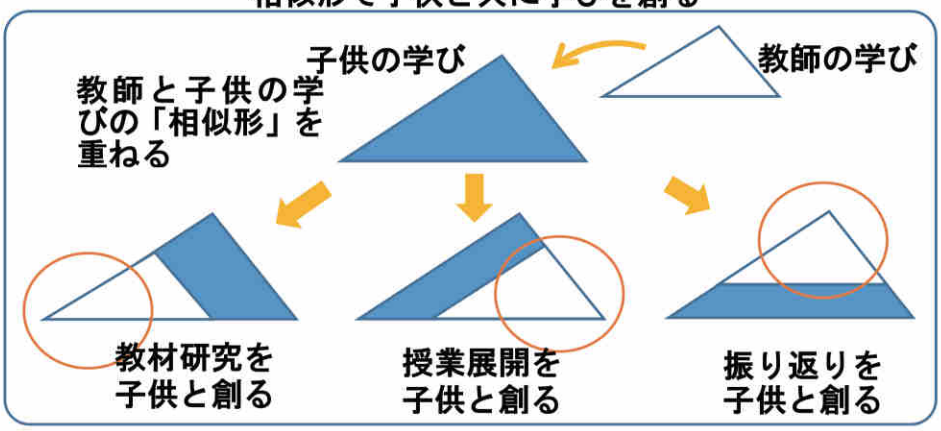
Well-being に向け、教師も子供も「学びのプロセス」において変革・責任・自分事・参画の姿が見られるような学びの環境を整える。

子供の学びと教師の学びは「相似形」

「子供と共に学びを創る」ことは可能なのかという教師の「問い」を対話的に共有し、学びとう営みを教師だけ、子供だけで創るのではなく、お互いの立場にとらわれない姿勢で学びを創る「観」を大切な理念とする。

「対話」で教師と子供の学びの「相似形」を重ねて城岳小の学びのスタイルを確立

相似形で子供と共に学びを創る



活動内容：　城岳らしい「学びの相似形」の充実

教科サークル活動

教師自身の「得意」を活かし、自分がチャレンジして伸ばしたい教科指導を同好会の仲間が集まるような感覚で協働的に研究をする。所属学年だけで研究推進するのではなく、教科サークルで学んだことを学年に持ち込み、学年で「やってみよう」と実践し、実践したことを教科サークルでも振り返ることで、「子供と共に創る学び」を追究する教科指導を推進する。

魅力ある学校づくり

「子供と共に学びを創る」ことを学校文化として持続可能な学びとするため、学校のいい授業を他の教師が参観することはもちろんだが、子供もいっしょに授業参観することで、「いい学び方」の具体を教師と子供で共有する。

じょうがくタイム

週時程に「じょうがくタイム」を毎週金曜日の6校時に設定することで、教科の学びや学校教示、委員会活動や係活動など、取組の「プロセス」を自ら省察しながら、自覚的に学ぶ習慣を身につける。特に、学校が定める身につけたい資質・能力（じ…自分らしく、よ…よく考える、う…美しい心、が…学習をつなぐ、く…クリエイティブ）の観点から振り返り、新たな問いを生んだり、メタ認知する。また、授業研究会の際は、5校時に教科の授業したあと6校時に子供と教師で授業の振り返り（リフレクション）をする。

取組の過程：「まずはやってみよう」から始める

教科サークル活動で「相似形」な学びを創る

「子供と共に創る学び」について、協働的な学びと個別最適な学びの一体的な充実を目指し、学びの「相似形」を構築する。子供がチームをつくって先生役となり教師と共に授業を行う。児童は、教材研究を家庭学習で行い、学校では教師と更に教材研究を重ねる。子供と教師で協働して授業を行うことで、子供の視点と教師の視点が重なり合い、より子供自身の「どのように学びたいか」に寄り添う。また、先生役子供の授業の仕方は、普段の受けている授業が鏡となっているので子供が授業をすることで、教師自身の授業改善にもつながる。

子供の教材研究ノート

子供が先生役

子供が先生役

子供と教師のリフレクション

魅力ある学校づくり

子供が先生となる学びを教師と子供で、「共に学びを創る」とはどのような学びなのかについて、実際に異学年間で授業参観を行い、授業後に子供・教師と対話しながら、「共に学びを創る」のことの意義などを子供同士で共有している。教師と子供で学びを創ることを城岳小学校の文化として、子供自身が受け継ぎ、学校全体で「相似形」を創り上げていくことで、児童にも教師にも魅力ある学校となる。

3年生の授業を先生と子供が参観

じょうがくタイム

「自立した学習者」を目指し、「見通し・チャレンジ・振り返る」サイクルで、課題発見解決のプロセスの充実を図るため、週時程上に1単位時間を設定し、子供がメタ認知を図ったり、見通しを立てたりし、学校が育成を目指す資質・能力（じょうがく）がどのように働いたか、また、働かせたいかについて省察する。

子供と目指す資質・能力を共有

また、「相似形」を意識した授業研究会として、授業研究後のリフレクションを子供たちと行う。学習者の視点と授業者の視点から学びを振り返ることで、子供たちにとっては、授業での学びをメタ認知、教師にとっては、教科の見方・考え方がどのように定着したかを見取ることができる。

活動の成果： 子供も教師もAgencyを発揮した学びへ駆け出す。

当初は、「何やればいいですか」と子供も教師も誰かに伺って実行する事が「主体性」があると捉えがちだった。「あなたは何をやってみたいのかな」と問い返すことで、「私は…」と「これをやってみたい」「これにチャレンジしたい」「このように学びたい」と「〇〇したい」と自分を主語に語れる子供と教師となった。「まずはやってみよう」が合い言葉となり、「実現するためには何が大切かな」と協働できる「城岳小学校学びの相似形」を究めようとする子供と教師となった。

優秀賞

【エントリー名】伊丹市立摂陽小学校　事務職員 大嵩 貴史

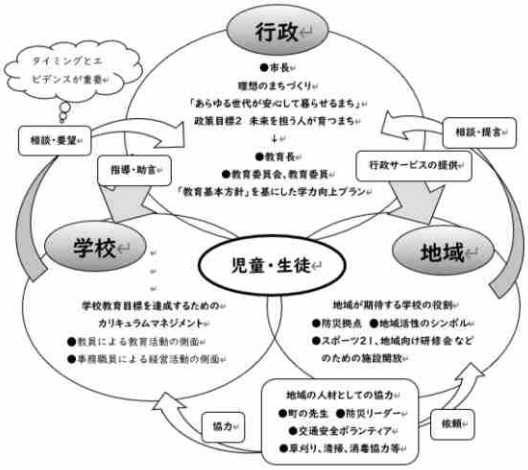
【活動名】事務職員の主体的な校務運営参画
～学校運営協議会と共に創る「チーム学校」～

解決すべき課題：

2017（平成 29）年、事務職員の職務規定は「従事する」から「つかさどる」へ（学校教育法第 37 条）と変更された。改正に際して文部科学省が発出した通知（28 文科初第 1854 号）によると、「学校におけるマネジメント機能を十分に発揮できるようにするため、学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職である事務職員の職務を見直すことにより、管理職や他の教職員との適切な業務の連携・分担の下、その専門性を生かして学校の事務を一定の責任をもって自己の担任事項として処理することとし、より主体的・積極的に校務運営に参画することを目指すものである」と説明されている。そこで、自らの専門性を校務運営に資するために、学校運営協議会に参加し、マネジメント機能を発揮することで、地域・保護者・行政と学校の橋渡しを行い、自校児童の課題を解決しようと考えた。

目標・方針：

事務職員のマネジメント機能（①タイム・マネジメント②リスク・マネジメント③コミュニティ・マネジメント④カリキュラム・マネジメント⑤学校組織マネジメント⑥スタッフ・マネジメント⑦財務マネジメント）の観点から、自校の児童の課題を捉え直し、学校運営協議会で地域・保護者・行政・学校が一丸となってその解決にあたること。



⇒そのために行うべきことは、

1，自校児童の課題の分析結果を学校運営協議会で共有
2，教職員が求めるサポート内容を洗い出し
3，地域・保護者がサポート可能なボランティアを協議
4，教育活動やボランティア活動に必要な資材・教具の計画的な発注・決済
5，教職員やボランティアでは解決できない業務を行政と連携して業者委託

活動内容：

1、自校児童の課題の分析結果を学校運営協議会で共有

①読書好きな児童がより本に興味を持つことができるよう、読み聞かせ環境や貸し出し環境を整えること
②不登校児童や遅刻しがちな児童も学校に来たくなるよう、学習活動で自信をもたせること
③多様な課題を抱える児童に対して教職員がきめ細かく対応できるよう、業務改善を行うこと

2、教職員が求めるサポート内容を洗い出し

・家庭科：６年生ミシン学習（ナップサック制作）、５年生手縫い学習（玉止め・玉結び）
・体育科：プール清掃、運動会前のグラウンド草刈り
・算数科：２年生九九暗唱
・音楽科：リコーダー指使い練習　等

3、地域・保護者がサポート可能なボランティアを協議

各ボランティアを計画し、次年度以降も継続しやすいよう、「学校運営協議会カレンダー」を作成（右図、一部抜粋）し、参加者の思いや留意点も記録しておく

学校運営協議会カレンダー

年	月日	活動	内容	注意事項	感想等
22	5月30日	家庭科サポーター	6年生ナップサックづくり、ミシン作業 5年生手縫いの基礎、玉留め	・サポーター説明会、打ち合わせが大切 ・ミシンの動作確認が必要	最初はお互い緊張していたが、児童からの挨拶や感謝の言葉が嬉しかった。
	6月3日	お掃除ボランティア	プール清掃活動	・掃除道具の準備 ・滑りやすく階段が急なので足元注意 ・熱中症対策のため水分補給を行う	作業は大変だったが楽しむことができた
	7月15日	第1回運営協議会	協議会委員による安全点検		
	9月3日	草刈りボランティア	運動会前の運動場の草刈り	・掃除道具の準備 ・熱中症対策のため水分補給を行う ・土を掘るので穴開き注意	教師を含めて150名ほども参加があり嬉しかった。マスクがたくさん落ちていた。

４、教育活動やボランティア活動に必要な資材・教具の計画的な発注・決済

★実体験を通して学ぶことの大切さ

・気体検知管やリトマス紙など、理科実験道具に新学習システム予算を重点配当

・コロナ対策で鍵盤ハーモニカの演奏に制約があったことから、卓上キーボードに予算配当

★コロナや注文時期の過密による品不足等の予想、複数年見越した適切な修繕計画

・テントや釘、雷管、ラインパウダーやにがりなどの在庫確認と早期発注

・プール清掃用の高圧洗浄機の修繕、２台ずつのミシン計画購入

★魅力的な図書館、安全・安心な環境づくり

・貸し出し用カバンをかける椅子用フックの設置

・大型テレビ、書画カメラ、テレビ台を導入し、読み聞かせの実施

・地震に備え、技能主任、技能員作業による本棚・テレビ台の固定作業の実施

５、教職員やボランティアでは解決できない業務を行政と連携して業者委託

①プールの排水工事の実施

②学校運営協議会の校内安全点検で議題に挙がったダンパー部分の業者による清掃の実施

③円滑なミシン学習を行うための、計画的な業者によるミシン点検・修繕作業の実施

④地域からの要望で、フェンスから飛び出す危険な枝葉の剪定作業の実施

取組の過程： 前任校で１年間運営協議会に参加していたとはいえ、事務職員の参加は極めて珍しく、まして摂陽小学校に異動してすぐに運営協議会に参加するとなると、他の参加者から疑問の声が挙がることが予想されたため、校長の許可を得て、なぜ事務職員が参加しているのかを前述の法改正による標準的職務に基づき簡潔に紹介させてもらった。その際にパワーポイント資料を作成し、異動して３か月で目にした教職員と児童の学習活動や、学校や地域・保護者ボランティア、行政主導の工事による環境改善など、自校で行われている取り組みについてまとめさせていただいた。

このことをきっかけに、２回目以降も新たな活動を紹介しつつ、前回の議論と今後の課題を整理・発信する役割を自然な形で引き受けることとなった。これまで模索しながら進められてきた学校運営協議会の活動とボランティア活動を「学校運営協議会カレンダー」という形でとりまとめることで、年度末の時点で次年度の計画の見通しを立てられるようになった。

ボランティア参加者の声を聞かせていただくと、「児童からの感謝の言葉がうれしかった」という満足の声や、「プール掃除では滑りやすく階段が急なので足元に注意する必要がある」などの次年度に向けた注意などの意見を多く聞くことができ、それらも「学校運営協議会カレンダー」に記録しておくことで、２年目の今年度は円滑に活動が実施できるようになった。

初めは学校運営協議会への理解があまり浸透していなかった教職員にも、業務改善になっていることや何より児童の学習に役立つことが少しずつ伝わってきており、「チーム学校」として一丸となって児童のために連携していくムードが高まってきている。

活動の成果：**子どもたちを中心とした「チーム学校」の共創が実現！！**

◆子どもたちはサポートをしてもらうだけでなく、教職員以外の人からもほめられる体験を通して、活き活きと学校生活を送る姿が見られるようになった。学校図書館司書の読み聞かせにとどまらず、その他の教職員や図書委員の児童も読み聞かせを行うなど、図書館の活用の幅が広がるようになった。

◆教職員は業務の負担感が軽減し、特に家庭科の裁縫学習では一人ひとりの学習支援に手が回るようになった。

◆地域・保護者からは、支援や作業の大変さはあるが、子どもたちと接することへの喜びの声や、教職員との連携を歓迎する声が聞かれた。

⇒学校運営協議会に参加し、事務職員としての専門性（マネジメント機能）を発揮することで、地域・保護者・行政と学校が連携し、児童の課題を解決する校務運営に資することができた！

優秀賞	【エントリー名】厚木市立毛利台小学校　総括教諭 髙橋 亮太 【活動名】ハッピーフィードバック大作戦!! 若手育成!いいところ見つけで教師力アップ

解決すべき課題：若手教師の悩み➡子どもをどう理解したらいいのだろう・・・

1．　職場内での年齢構成を見ると、若手教員の増加が著しく、学年団内での日常的な若手教員の人材育成が急務である。「子ども理解」や「評価」のための「見取る力」等の力量形成の場をつくり、若手教師を組織的に育成していく必要がある。
2．　若手教員をケア・支援しながら育成していく中堅層・ベテラン層が、どのようなことを意識して若手と関わって行ったらよいのか、整理・分析しながら実践していく必要がある。
3．　児童の居場所を各学級につくり、自己肯定感や非認知能力を高める必要がある。

目標・方針：子どもも、教師自身も成長しハッピーになる➡ハッピーサイクルをつくる

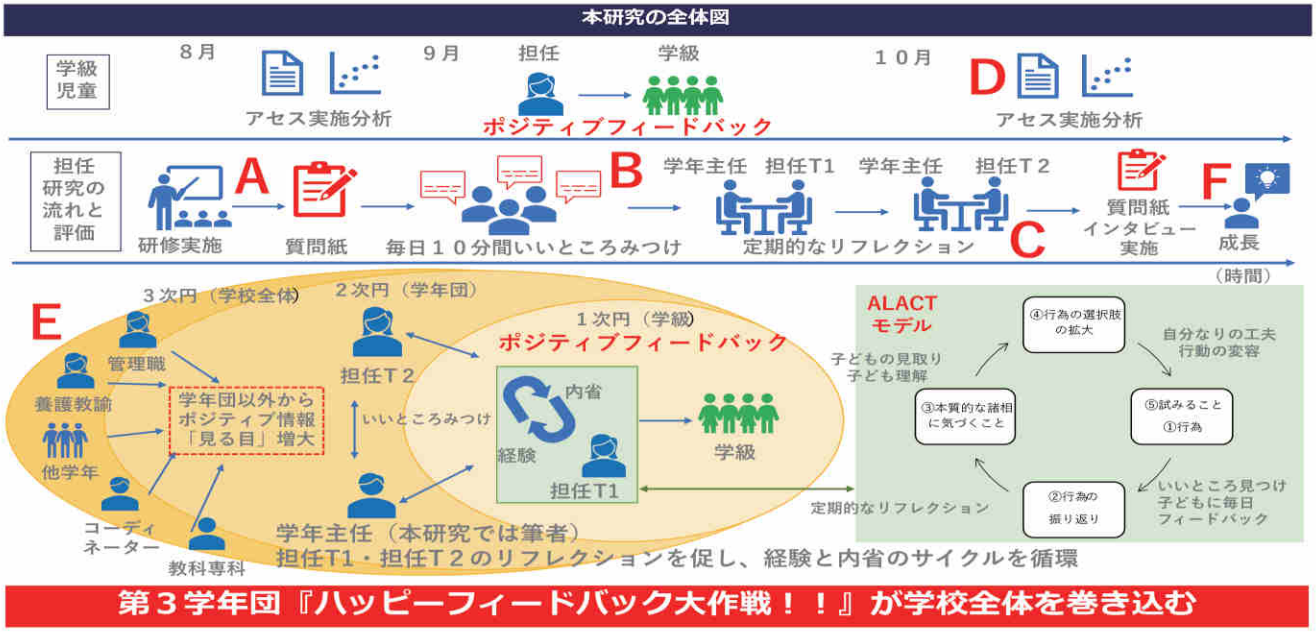
1．　子どもたちの「いいところ見つけ」を学年団で行うことを通して、若手教師の子どもを「見取る」力量の育成や、ポジティブなフィードバックの仕方を獲得させる。
2．「いいところ見つけ」を学年団で行う学年主任は、若手教員と共に研修会を実施し、ALACT モデル（korthagen et al.2001）の循環が適切に行われるようにファシリテートする。
3．「いいところ見つけ」⇒『ハッピーフィードバック大作戦！！』と名付け、子どもたちに毎日の朝の会で、前日に教師が見付け学年団内で共有した「いいところ」を紹介する。肯定的なフィードバックを積み重ねることで、自己肯定感や非認知能力を向上させる。

活動内容：　６つの活動で構成（アルファベット A～F）は取組の過程：本研究の全体図に対応

1．「いいところ見つけ」を実践する学年団での【研修会】の実施・・・　A
2．毎日１０分間、学年団で『ハッピーフィードバック大作戦！！』を実施・・・　B
3．若手教師の【リフレクションタイム】を毎週実施・・・　C
学年主任（本報告では筆者自身）は１週間に１度、学年団の若手教員一人一人と、取組の様子を振り返り、若手教員の気付きや、行為の価値づけをしながら、教師の成長を促す。
4．児童への ASSESS（学級全体と児童個人のアセスメント）の実施・・・　D
『ハッピーフィードバック大作戦！！』で肯定的なフィードバックを受け続けた児童にどのような変化があったのか適応感を２カ月後に１回、測定・分析し、アセスメントを行う。
5．学校全体を巻き込んだ『ハッピーフィードバック大作戦！！』を展開実施・・・　E
学年団の取組を学校全体に発信し、子どもたちの「いいところ」の情報を学校全体から集め、子どもたちを【肯定的に見る目】や雰囲気を醸成する。
6．研修と実践の評価を実施・・・F
「研修転移」が生じているか評価する
◎カークパトリックの「４レベル評価モデル」を４件法と自由記述のアンケートで実施
◎若手教師２名への半構造化インタビューを行い、【研修】や『ハッピーフィードバック大作戦！！』で学年主任と ALACT モデルで振り返りをすることで、どのように自身が変容したかについて評価する。

➡学年団での研修会の様子

取組の過程：本研究の全体図として整理➡大きなサイクルを作り出すことができた



◎１日たった１０分といえども、継続してよいところを見つけて学年団で共有し合うことは、習慣化されるまで時間が必要だった。学年団内で何度も改善策を話し合い、学年会、教材研究、保護者への連絡等、放課後の時間の使い方を改めて見直すきっかけとなった。結果、集中して短時間でも実施できるようになった。➡繰り返すことで洗練されていった

◎若手が子どものよさを語るまで、じっくりその言葉が紡ぎ出されるまで待つ姿勢や、どうしても特定の児童によさを見いだせないと思ってしまう状況になっているときに、どう肯定的に他者を捉えるか、そのマインドセットなどを伝える場面に苦労した。➡主任の価値観の押しつけにならないように、対話を重ねながら、どのように課題がある児童等に関わっていくかについても検討した。いいところ見つけをしていても、クラスでは当然トラブルは発生する。その対応や、集団をどう育てていくかについても一緒に考え、納得解を探っていった。

活動の成果：

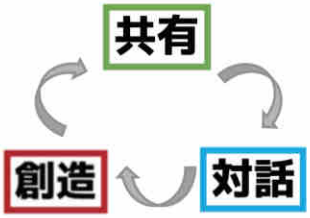
1. **評価について**：反応レベルの評価では、２名とも研修への満足度が高かった。学習レベルの評価では、２名とも子どもの自己肯定感や非認知能力の育成を意識したポジティブなフィードバックができるようになっていることが示された。行動レベルの評価では、２名とも学級の日常生活の中で、子どもの行為や言動を肯定的に受け止め、小さなことでも適切なタイミングでフィードバックをするように変化していたことが示された。成果レベルの評価では、学年団の取組が、学校全体に波及し、学年団だけではなく、管理職や級外の教師からも児童の肯定的な情報が学年に集まるようになった。これらのことから、**若手の人材育成を目的とした取組から、学校全体を巻き込んだ組織開発が行われたと考えている。**
2. **実践者の成長について**：リフレクションを促す側（本研究では自身）の教師が、常に自らをリフレクションするようになり、**互いのリフレクションの連鎖**が教師の教師力のようなものを高めていくのだと実感した。
3. **人材育成・組織開発の面から**：『ハッピーフィードバック大作戦！！』を触媒に、学年団内で学年主任が若手教師の ALACT モデルの振り返りを適切にファシリテートし、若手教師の成長を支える取組は、他の小学校でも実践が可能であり、汎用性が高いものだと考える。１日にたった１０分間、子どものよい姿を学年で共有し合う、若手に「そのよいと考える姿」がなぜ起きているのか、その振り返りを促す、そんな活動がどこの学校でも日常的に行われたら、子どもも教師も、もっと生き生きと学校生活を送ることができるのはないかと考える。

優秀賞

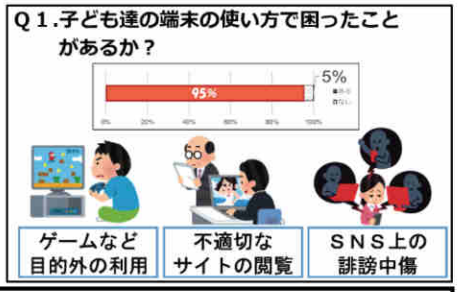
【エントリー名】沖縄県 那覇市立城北中学校

【活動名】デジタル・シティズンシップの醸成
～学校全体の対話によるガイドラインの創造～

解決すべき課題：１人１台端末の生徒の活用方法



しかし!!



ＧＩＧＡスクール構想によって、学習用に配布されている１人１台端末は、生徒の学習に欠かせないものとなっている。

トラブルや問題行動が生じているのも事実!
→本校の 95%の職員が困ったことがあると回答
見かねて、一時的に利用を停止したことも・・・

目標：生徒自身で納得解を創り上げる取り組みを通してデジタル・シティズンシップを醸成する。

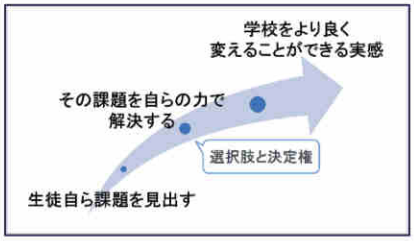
学級活動と連動した生徒会活動により
一人一台端末ガイドラインの策定

・既存のガイドラインを他校から持ち込むのではなく・・・・
→生徒の声を拾い、その声を支持的な風土の下で具体化させ、ガイドラインの在り方を主体的に模索していく。
・大人が一方的に決めるのではなく・・・
→情報の収集と課題の分析及び把握、原案の作成、学校への提案、評価と修正を生徒主体で展開する。

活動内容：１人１台端末ガイドラインの策定の流れ

発見期

１．生徒の問題意識から「真正な課題」を設定



・昨年度末に行われた委員会活動の振り返りの場面で、１人１台端末の活用方法に問題があることが取り上げられる。（問題発見）
・その解決策として、「自分達で端末の利用に関するガイドラインを創る」といったアイディアが生まれる。

計画期

２．職員とのビジョンの共有

チーム学校として取り組む

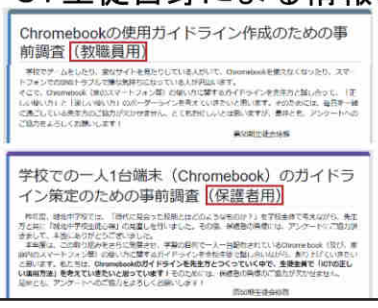
共有

教員と生徒が対話的に、端末の活用方法について考える意義を共有

・職員同士の情報共有の場を、年間を通して設定し、本実践を学校全体で行うものと位置づける。
・資料は、共有ドライブにまとめ「いつでも」「誰でも」確認できるように!

調査期

３．生徒自身による情報の収集



Google フォームを活用し、生徒・職員を対象に実態調査
①生徒自身でフォームの作成や質問項目を決定し、教師は、ファシリテーターとして関わる。
自分たちの力で実施することに意味がある!
②学校の中だけで子どもたちの世界が終わらないように、公文にＱＲコードを添付し保護者にもアンケートを実施

分析期

4. 実行委員の生徒同士の対話により、多角的な視点から課題を分析

・分析するのも、もちろん生徒！
→50 名の実行委員が、話し合いによって生徒・職員・保護者のそれぞれの立場から「優先して解決すべき課題」を 18 個に選定！

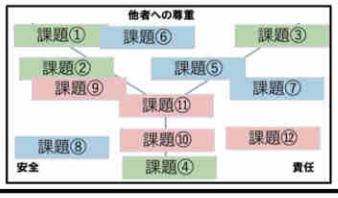
生徒	先生	保護者
余計なことを調べる（人が傷つく内容の物）	学校でゲームをしている	使用時間が長い
人のアカウントを乗っ取る	元の場所に片付けない（保管方法を守らない）	スマホに夢中になり勉学が疎かになる
画像を送る（相手の許可を得ずに写真を撮る）	Win BindO 等をつく	セキュリティーに関する知識が低い
学校で麻酔を流んでいる	授業中に関係のないことをしている	SNS上のトラブルで悩んでいる人がいる
変なサイトを見る（スケベ）	フィルターを突破する	情報リテラシーについて理解していない
スクラッチで遊んでいる（相手からの許可や確認が不足している）	孤独に陥う人がいる	学習サイトを活用できていない

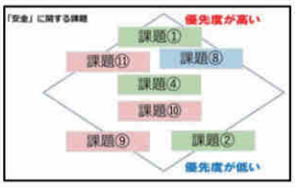
○立場によって課題が違うことに気付く→生徒も学校全体で解決すべき課題として認識

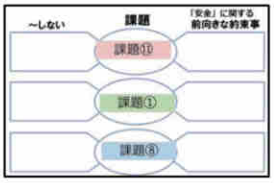
創造期

5. 実行委員の生徒＋全職員の対話により、解決策を模索
→夏休みに徹底的に議論（思考ツールを活用し、ガイドラインの原案を作成）

① 課題の特性の理解　② 課題解決の優先度の検討　③ ガイドラインの構想







①Ｙチャートを用いて「安全」「責任」「他者への尊重」の三つに分類
②ダイヤモンドランキングを用いて、早急に解決すべき課題を決定
③キャンディーチャートを用いて「～しない」といった制限的なルールを考えた後、「～する」といった前向きな約束事にリフレーミング

6. 一斉学級会により、全生徒でガイドラインの原案を現実に即したものに修正

・司会団を結成し、学級活動と生徒会活動の連動を実現
→学級会の準備から運営までを生徒が行う（自治的な活動の推進）
・各クラスで最も大切にする約束事を話し合いで決定

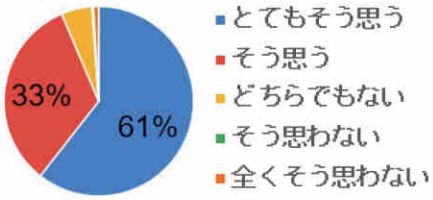
○それを集め、城北中学校オリジナルの１人１台端末ガイドラインの完成！

取組の過程：どのように周りと協働したのか

生徒と職員の組織づくりと協力体制の構築	生徒指導主事との連携（積極的な生徒指導）
生徒組織（実行委員会）：生徒会総務・中央委員・各種委員長・団長 職員組織（策定委員会）：管理職・教務主任・情報主任・ＧＩＧＡ担当・生徒会担当・生徒指導主事・PTA会長 主役は生徒!! 職員が様々な側面から生徒の取り組みを支援	・生徒指導のイメージの転換！ 叱る生徒指導ではなく・・・ →子どもに活躍の場を与え、褒めて認め、良い文化の形成を促していく。

活動の成果：生徒の変化（事後調査の結果）
真正な課題の解決に向けて生徒主体の取り組みをチーム学校として推進することで・・・

「この取り組みを通して、１人１台端末をより善く使おうとする意識が高まりましたか？」（全校生徒 N=345）
→とてもそう思う＋そう思う⇒肯定的な回答が 94%
１人１台端末の課題を自分事として捉えられるように！



○本実践が生徒のデジタル・シティズンシップの醸成に寄与していることが示唆

優秀賞

【エントリー名】宮城県小牛田農林高等学校　鈴木 崇之

【活動名】校内外との協働で魅力ある学校へ
学科や地域の特色を活かしたカリマネの実践

解決すべき課題：～本校の概要～令和５年度に創立１３５年を迎える伝統校で、全国的に見ても珍しい総合学科と専門学科（農業技術科）の併設が特色。しかしながら、以下の①～③が課題。
①総合学科には科目選択の目安として四つの系列（人文社会、自然科学、情報ビジネス、健康福祉）が設定されている。教員の専門領域も多様だが、系列を越え協働性を発揮することが困難。
②職員による学校評価において、職員間の連携を問う項目では否定的回答が例年３割以上。特に学科間でセクショナリズムに陥りがちで、二学科併設の特色を活かしきれていない。
③昔から地域社会を担う人材を輩出してきたが、新型コロナウイルス流行以降は地域とのつながりが途絶えがちに。また個人的なつながりが多く、持続可能なシステムとは言い難い。令和９年には、美里町（本校所在地）内における高校は本校のみになる。地域と協働する重要性はますます高まり、活動の充実と体制整備が急務である。

目標・方針：以下の①～③の協働で、上記「解決すべき課題」にアプローチする

①総合学科内の各教科・各系列＋総合学科内の各教科・各系列
総合学科の教員の協働性を高め、専門領域の多様さを活かす

②農業技術科＋総合学科
学科を横断した取り組みを実施する

③地域＋学校
地域資源を発掘・整理・活用する

３つの協働

学校内外のリソースを結び付け、伝統と特色を活かした魅力ある学校に進化していく

活動内容：上記の「解決すべき課題」と「目標・方針」に対応する形で以下の内容を実施

①―１総合学科の全選択科目を SDGs との関連で整理した「SDGs 学びの」地図を作成
各教科・各系列を越え、総合学科に関わる全教員が協力し、SDGs との関連で学習内容を整理した一覧表を作成。SDGs を通して俯瞰的な視点から各教科・各系列間のつながりを捉え、各教科の授業や探究活動をデザインした。

①―２「総合的な探究の時間」の指導体制見直し～「ファシリテーター＋アドバイザー制」～
探究活動で実際に授業をする教員を「ファシリテーター」、授業には入らず、生徒の探究テーマに応じて専門性を活かしたアドバイスを行う教員を「アドバイザー」と位置づけた。総合学科に関わる全教員が役割分担しながら探究活動の指導にあたる指導体制を構築した。

②―１草の根からはじまる学科横断型授業
いきなり学校全体で取り組みを行うのではなく、様々な教員のニーズを聞き取り、少しずつ学科横断型授業の実績を積み上げた。「学科横断は当然」という雰囲気を徐々に醸成した。

②―２学校の PR を合言葉に！運営計画の目線合わせ
県内の総合学科は軒並み定員割れを起こしており、農業を専門に学ぶ高校生も減少傾向にある。危機意識を共有し、「学校の PR」を両学科の運営計画に位置づけ共に取り組んだ。

②―３学科横断探究交流会の実施
これまで探究活動で両学科が交流する場面は、年度末にその成果を発表するのみだった。年度途中の中間発表を学科を越えて行うことで、生徒にとっては他学科からの貴重なアドバイスを得る機会に、教員にとっては指導ノウハウや外部連携先を共有する機会にした。

③―１生徒の社会貢献をしたい気持ちを尊重、ボランティアの推進からはじめる地域協働
生徒向けアンケートから社会貢献意識の高さが判明（「あなたは社会貢献をしたいと思いますか」→肯定的回答が９割以上）。具体的なボランティア活動を通じて地域協働を再スタート。

③―２地域を探究活動のカリキュラムに組み込む～「地域探究」始動～
美里町を題材にした「地域探究」を新しく実施。さらに学校近辺に広がる世界農業遺産「大崎耕土」を活用した講演会などを実施。他の地域にはない、本校独自のカリキュラムを作成。

取組の過程：全てのベースに「ヴィジョンの共有」と「働き方改革の視点」を

※ヴィジョンの共有→本校と実態が近く、先進的取組を行う島根県の二校（いずれも「地域との協働による高等学校魅力化推進事業」）へ視察を実施。総合学科、農業技術科、教務部の三つの立場の教員が参加し、報告会では目標・方針①～③を提言。全校でヴィジョンを共有。

※「働き方改革の視点」→「今あるものを活かす」「教員の必要感と手ごたえを大切にする」「ICT 等を活用し現実的な負担軽減を図る」ことで、新しい取組に伴う疲弊感を回避。

①―１企業の経営方針や入試問題でも取り入れられ始めた SDGs。学校現場でも必要感が増大（本校教員向けアンケート「SDGs に関心がありますか？」→「非常に関心がある・まあまあ関心がある」の合計が８割以上）したことを背景に「SDGs 学びの地図」の作成開始。作成はシラバス検討のタイミングとあわせ、業務の効率化を図った。さらにペーパーワークに陥ることを避けるため、探究活動のテーマ設定の教材として活用したり、生徒の反応を教員へフィードバックしたりすることで、手ごたえを感じられるようにした。総合学科に関わる教員が一致団結し、SDGs という俯瞰的な視点を持ち、情報交換をしながら指導にあたるようにした。

①―２探究活動において外部との連携は不可欠だが、連携先の選定や交渉など指導する教員の負担感は大きい。複数の教員が専門性を活かして指導にあたることでこれを容易とし、探究活動を活発化。アドバイザーの指導は iPad と学習アプリ（ロイロノート）を最大限活用し、業務の効率化を図りつつ、教員の ICT の研修も兼ねながら進めた。役割分担と教員の必要感が高い ICT の研修を取り入れることで、探究活動をきっかけに総合学科内の教員の協働性が向上。

②―１様々な教員のニーズを井戸端会議のように聞き取り、ボトムアップから取り組みをスタート。その上で学科横断の授業を単発で終わらせず、他の活動につなげたり、内外へ情報発信をしたりすることで、少しずつ学科の垣根を払っていった。例）農業技術科で育てた野菜を総合学科のフードデザインの授業で調理し、レシピにまとめる→農業技術科の販売会で野菜をレシピ付きで販売したり、学校のお便りやホームページで取り上げたりした。

②―２学科を越えて話し合いを重ね、リアルタイムで情報発信する「ブログ」をホームページに創設したり、各学科のお便りを一括して近隣中学校へ配付したり、足並みを揃えて効果的な PR を実施。さらに地域のイベントに共同参加し、PR 活動を通して学校の一体感を醸成した。

②―３両学科の指導ノウハウを共有し、プレゼンテーションの様式をそろえて中間発表会を実施。普段見落としがちな他学科の指導内容に触れ、改めて二学科併設という本校の強みを認識する機会に。さらに発表会を通して、外部の連携先を共有し活動の幅を広げるなど、具体的な成果にもつなげた。探究活動を通して学校を活性化させていこうという共通認識が成立した。

③―１学校評議員などこれまでのつながりを活かして活動を計画。（株）ファーストリテイリングの「届けよう、服のチカラプロジェクト」を通して公共施設との関わりを構築するなど、新規開拓も並行して実施。新聞や町の広報で取組を地域に周知し、さらに活動の輪を広げた。生徒にはキャリアパスポートを用いて活動を振り返らせ、自ら進んで活動するよう促した。

③―２令和３年度より美里町では地域おこし協力隊が活動している。地域探究の導入で協力隊の講演を実施し、生徒が地域に関心をもつきっかけとした。さらに世界農業遺産「大崎耕土」の講演会や見学を実施。振り返りをポスターにまとめ、全国農泊ネットワーク宮城大崎大会で展示するなど、地域資源を掘り起こしながら行政などとも連携を広げ、地域との協働を強化。

活動の成果：〇生徒が多様な視点を獲得→各方面の協働を意識した教育活動を展開することで、多角的な指導が可能に。様々なコンクールに多数入賞（河北新報第 28 回新聞記事コンクール「学校賞」、2022 年度“届けよう、服のチカラ”アワード優秀賞）するなどの成果が生まれた。〇取組のシステム化→各方面との協働により学校の魅力向上を目指す新委員会（学校魅力向上委員会）が発足。単発的・属人的な活動ではなく、継続的・組織的な取り組みへと進化。〇内外の様々な組織や人と協働することに対して、教員がポジティブに捉えるようになった。さらに新たな領域での協働へつながった→地域と部活動の協働（例：吹奏楽部による町内福祉施設へのコンサート）、県内の他校の総合学科との協働（オンラインの相互発表会）など、多数の波及効果あり。

入 選	【エントリー名】愛媛県砥部町立麻生幼稚園 【活動名】地域とのつながりの中で幼児が育つ ～地域連携の見直しと工夫～

解決すべき課題：

地域の独自性を生かした教育を充実させ、幼児の体験を豊かにすることで育ちを支えたいと願っている。しかし、これまでの地域の方との交流は、イベント的なことや、一過性に終わってしまうものが多く、触れ合う楽しさもその場限りのものになることが多かった。また隣接する障がい者の事業所の方とは交流ができていないままであった。

自園の HP がないこともあり、取り組んでいることや、幼稚園教育について地域の方に知られていないという課題もあり、発信することから始めて交流の見直しや工夫を行うことにした。

目標・方針：

1　幼児の姿だけでなく、重点的に取り組んでいること「遊びの中の学び」に視点を置いた取組を園便りで地域に発信し、コメントをもらい、連携や交流について検討する。

2　地域との交流が、幼児の豊かな経験（心の育ち）につながる工夫、実践を行う。

3　自園に隣接している障がい者の就労支援事業所と、継続的な交流、日常的な関わりができるように、職員同士の連携を深めながら、幼児と障がい者の交流を継続していく。

活動内容：

1　園通信の発信

「遊びの中の学び」に視点を置いた教育実践。事例を取りながら、環境や援助の検討を繰り返し、幼児の気付きや心の動きを発信。

40 枚を施設や自宅に配布、30 枚の感想をいただく。地域の方に幼児教育を理解してもらうきっかけになり、「幼児がいることが地域の活力になる、応援したい」という声を受け取る。⇒　実践へ

2　交流の見直し・工夫

○　とべ動物園スタッフの来園・・・遠足に行く前に動物の話を聞くことにより、動物を見る時に注目する点や、キーパーの仕事に興味が広がる。

○　砥部焼作り体験・・・絵付けだけでなく粘土から自分の作品を作り、２度の窯焼きによる形や色の変化を知り、出来上がった喜びを感じる。地元産業の砥部焼への親しみが増す。

○　児童館訪問・・・コメントから児童館スタッフの温かい思いを知り、交流を増やす。保護者に様子を知らせることにより、家庭からの利用者も増える。

3　障がい者と幼児の交流　（取組の過程へ）

取組の過程：　障がい者と幼児の交流

『就労継続支援Ｂ型事業所』

施設の建替えをきっかけに階段のペンキ塗りに誘われたが、障がいがある方と幼児がどのように交流してよいか分からない。安全は確保できるか。保護者の理解が得られるだろうか。

・園長と施設長が話し合いを重ねる。
（幼稚園職員の不安を素直に伝える）
・障がい者差別解消法等、全職員が研修を受け、障がい者について知る。
・保護者に相談すると、交流したらよいと後押しをしてもらう。
・両方の職員が話し合い、継続できる交流を計画する。　幼児期から関わることの大切さ！

～交流開始当初（R3.２月）～

Ａ児「あのおじいちゃん、幽霊みたい。手が震えよる・・」

＜衝撃的な言葉＞

そんなこと言ったらダメ！と言いそうに・・

＜教師の戸惑い＞

＜施設長に相談＞

ありのままの幼児の言葉を受け止めてい

教師「おじいちゃんはね、病気で手が震えるけど、お弁当を作る仕事してるんよ」

＜職員間で話し合い＞

疑問を感じて当たり前。幼児の純粋な気付きや発信をチャンスと捉えて、向き合う。

＜交流を重ねる＞

Ａ児「おじいちゃん、一緒に将棋しよう！」躊躇なく震える手を引っ張り部屋に招く。

＜交流が楽しみになる＞

交流の工夫

○　手作りおもちゃを持参し、物を媒介に触れ合う。
○　挨拶、散歩で覗きに行く、ちょっと声を掛けるなど、日常的な交流を大切にする。
○　様子だけでなく、幼児のつぶやきや変容を保護者に知らせる。
○　イベントに誘って一緒に楽しむ。

活動の成果：

○　定期的に園便りを通して地域に発信していくことで、自園で重点を置いて実践していることに理解が得られ、応援隊になってもらうことができた。その結果、これまでにない交流ができたり、幼児の心を動かす体験ができたりした。また、職員に励ましの言葉をもらったり、次回も見せてほしいとの声が上がったりして、教師自身の喜びや意欲につながった。幼児がいることが、地域の活力になっていることも再認識した。
○　地域のいろいろな方と結びついたことで、新たな交流だけでなく、毎年計画的に行う交流をアレンジしたり幅を広げたりするアイディアが、職員から次々出てくるようになった。
○　当初は、幼児の興味や関心が広がる程度を想像していたが、幼児自身が地域の人や物に心動かされ、自ら関わろうとする姿が見られ、様々な気付きや発見があった。幼児も教師も地域の方の温かさを実感できたことは大きい。
○　幼児期から障がいのある方と触れ合う経験は、多様な人がいることを知り、相手を理解しようとすることにつながることを実践から学んだ。大丈夫だろうかと構えるのは教師側で、幼児の柔軟な心が、障がい者との距離を縮めた。

入 選	【エントリー名】市立札幌豊明高等支援学校 【活動名】ウェルビーイングの根っこを育てる ～「3つの価値」を中心にした学校づくり～

解決すべき課題：

軽度の知的障害がある高校生が通う本校は、卒業後の職業自立を目指した学習活動を中心に展開してきた。しかし時代の変化によって社会の構造や価値観、求められる人材が変化し、学校や教師の役割も問い直されている中、本校でも学びのアップデートをすべく令和３年度に学校改革のプロジェクトチームが発足。始めに学校教育目標から見つめ直す教職員アンケートを実施した。そこで見えてきたのは、生徒の進路決定が本校の目指す最終ゴールではなく、卒業後も**個性豊かな人生を幸せに生きていく生徒、**そして**社会の中で他者と助け合いながら生きていく生徒を育てたい**という教職員の思いであった。

目標・方針：令和４年度より、新しい学校教育目標（スクールミッション）を制定した

・・・「自分の人生をより良く生きようとする人を育て、社会のウェルビーイングを実現する」

本校が定義するウェルビーイング＝「自分の人生をより良く生きようとする」人を育てるために、目に見える成果だけではなく、目に見えない心の育ちに目を向けたいと考えた。前述のアンケートから**「豊明が大切にしたい３つの価値」**を整理し（資料１参照）、教職員・生徒・保護者・関係者が目線を合わせて生徒の学びに向き合っていくことで、卒業後も様々な出会いや経験に価値を見出しながら生きていく「ウェルビーイングの根っこ」が育てられるのではないかと考えた。

活動内容：「豊明が大切にしたい３つの価値」について対話する授業やワークショップ型研修を実施した。

１対話で作る心理的安全な場づくり

・各授業（活動）の前にアイスブレイクの時間をとる
・朝の SHR などで短時間のコミュニケーションワークを継続
・ポジティブな情緒的交流をシャワーのように

２教職員間で価値の共有～最終ゴールへの目線合わせ～

・職員会議などでワークショップ型研修の実施
・組織の運営計画作成や反省時に３つの価値を使って対話
・道徳教育の重点目標や、総合的な探究の時間の観点と関連

３生徒と価値の共有～学びに「価値」を見付ける習慣を～

・学年始めに３つの価値について考え、学年目標に！
・節目で学びを振り返るキャリアパスポート（資料２）
・全校「グッジョブ週間（PBIS）」で行動強化（資料３）
・学校評価アンケート実施

４保護者や関係者と価値の共有～パートナーシップの土台に～

・学校関係者評価委員会での対話会
・PTA 研修会で対話形式のワークショップ（資料４参照）

資料１本校が目指す生徒像と「３つの価値」の理念図

資料２ キャリアパスポート

資料３ 全校グッジョブ週間

資料４ PTA 研修会の様子

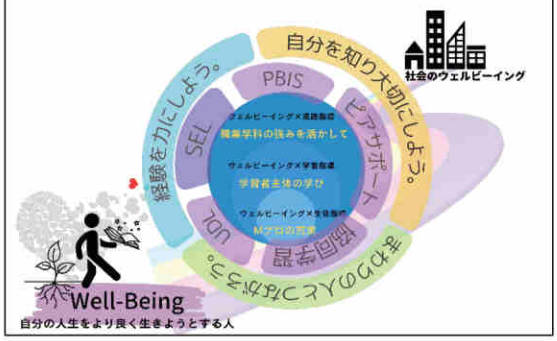
取組の過程：

１ウェルビーイングの「根っこ」を育てるカリキュラムのデザイン（資料５参照）

（１）ウェルビーイングの根っこを育てる生徒指導

ウェルビーイングの根っこを育てる学びの土台は**プロアクティブな生徒指導**である。前述したような心理的安全な場づくりを意識し、専門家の監修のもと社会性や思いやりを学ぶ SEL やピアサポートトレーニングの学習（「通称 M プロ」）を教育課程に位置づけたことで、生徒間の対話や思いやりのある言動が増え、生徒の変容を肌で実感することができた。そして**生徒指導が徒労ではなく創造的な教育活動**へと進化し、生徒の発達を支えるための理論研修が教職員の共通言語となってチーム力が向上したことであたたかな学校風土が生まれ、本校の大きな強みになっている。

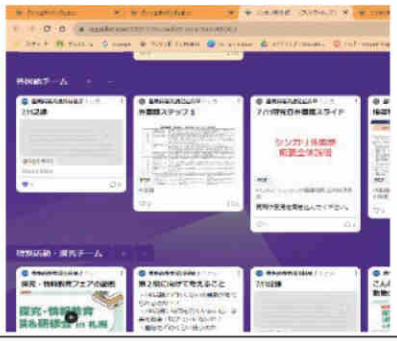
資料５　新グランドデザイン（案）



（２）ウェルビーイングの根っこを育てる学習指導

学習面では、教職員も生徒自身も、**「学習者中心の学び」へとマインドセットチェンジすることが**重要である。生徒が自分の得意な学び方を選択し、主体的に学ぶことができるように UDL（ユニバーサルデザインラーニング）の研究を専門家と共同で行っている。各教科等の学習で**自ら学びを舵取りできるという「実感」**＝主体的な学習者としての成熟を促すことと、「３つの価値」を用いて**自らの学びに価値を見出す思考の習慣**を育てることとの両輪によって、ウェルビーイングの根っこがより強く育っていくと考える。

資料６　対話用のパドレット



２　対話で共創するカリキュラム

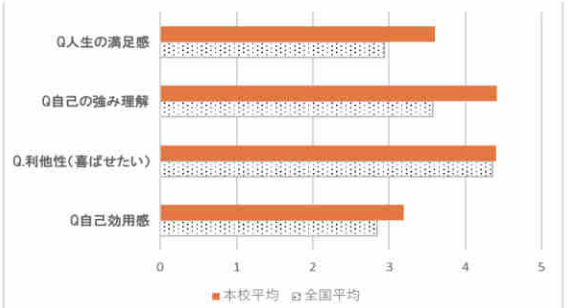
学校改革が持続可能なものであるために、**対話による組織自律型の改革**を目指した。プロジェクトチームのメンバーはファシリテーターとして、問いを投げかけ、対話の場づくりをすることをその役割としている。改革が具体的になるほど学校の中にモヤモヤが広がっていくが、それは前進であり、**「モヤモヤ」は組織が大切にしたい何かに近づくための好機**ととらえ、ICT ツールや校務支援システムのアンケート機能等を活用し、限られた時間の中で様々な対話の場づくりをしている（資料６参照）。

活動の成果：

令和５年、(株) inspire high が開発した**ウェルビーイングアンケート**を全校生徒に実施した。ほぼすべての項目において全国平均を上回る数値が見られ、特に本校の「３つの価値」と関連が深い**「自分の強み理解」「利他性」「自己効用感（社会への貢献）」などの項目において非常にポジティブな結果であった**（資料７参照）。

内田由紀子氏の研究（資料８参照）により、ウェルビーイングは「個人」から「利他」へと深化していくこと、また**「自分」「他者」「社会」の幸福な状態が循環**していくことの重要性が示されている。**本校が大切にしたい「３つの価値」を学校にかかわる全ての人たちと共有**する取組が「３つの循環」を生み、“私たち”と社会のウェルビーイングを向上させることを目指し、学校づくりを続けていきたい。

資料７　アンケート結果



資料８　ウェルビーイングの循環

内田,2022 中央教育審議会 教育振興基本計画部会資料より引用

入 選	【エントリー名】愛知県豊橋市立大清水小学校 【活動名】地上の楽園プロジェクト ～みんなで創る。みんなが楽しい学校づくり～

解決すべき課題：昨年度までの本校は，「トラブルがおきないように」という管理主義的な雰囲気が残っており，児童に多くの制限を強いていた。その結果，抑圧されていると感じる児童による問題行動が後を絶たず，その対処に時間を費やす教職員が疲弊する様子が見られた。そして，毎年のように休職する職員がいた。そこで，今こそ，管理主義的な古い学校文化を打ち破り，子どもも大人もみんなが幸せな，「地上の楽園」と言われるような新たな学校文化を創造したいと考えた。

目標・方針：自ら学校を動かそうとする，教師・児童を育てよう！

学校全体の意識改革を図るために「人生に失敗はなし！あるのは学びだけ！」を合言葉として，新しいことに挑戦できる雰囲気を醸成する。意識は変わった教師が，勇気をもって児童に任せる場面を増やし，自分たちの意見が学校生活や行事に反映される経験を重ねていきたい。そして，児童と教師が「こんな学校にしたい」と夢を語り合う学校をめざしたい。

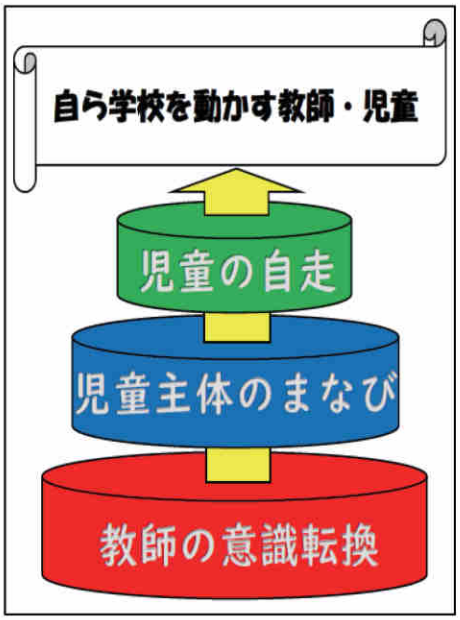
活動内容：

①教員の意識改革

意識改革を迫る手立てとして，昨年度まで，「トラブルが起こるから」「ゲーム機になってしまうのでは」と使用に制限をかけていたタブレット端末の日常的な持ち帰りを行う。「まなびポケット」を使い，連絡帳を廃止し，連絡ツールとして活用したり，学校からのお便りのペーパーレス化や保護者会の日程調整をオンラインで進めたりする。教師が便利さを実感することで意識改革のきっかけとしたい。また，「デジタルシティズンシップ」についての研修会を行い，子どもたちにとってどのような力が必要なのか共通理解を図り，新しい学校文化を創造する意義を共有したい。

②児童主体の新たなまなび

これまでの一斉授業の形態から ＩＣＴ機器を有効活用した子どもの主体の学びへの転換を図る。まず，全職員を県内各所の先進的な取り組みをしている学校へ派遣し，情報収集を行う。そして，イメージを共有するために校内で研究授業を行う。具体的には，タブレット端末で課題に対する自分なりの考えを発信し，課題克服のために同じ意見の児童と協同したり，違う考えの児童に質問したりする学びを展開したい。「主体的で対話的で深い学び」の具現化である。その過程で，主体的に課題に向き合い，解決できる児童を育てたい。この学びの積み重ねにより自走できる児童へと高めていく。



③児童の自走

児童主体の新たなまなびで培っている力を学校生活や行事で発揮する機会を設定する。具体的には，生活のきまりの見直しや行事の運営を積極的に児童に任せていく。自分たちの意見によって学校が変わった，自分たちの力で行事を成功させたという経験の積み重ねは，プラスのスパイラルとなり，「学校をもっとこうしたい」という次への活動意欲となり，やがて，自走する児童へと成長していくと考える。また，児童の活動を支える過程で，教師自身も学校運営に自分事としてかかわる楽しさを実感し，自走する教員となることを願っている。

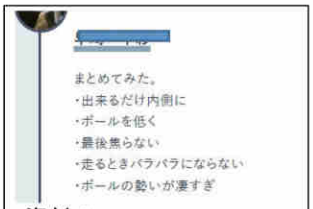
活動の過程

①「人生に失敗はなし。あるのは学びだけ。」

タブレット端末の日常的な持ち帰りを進めると，児童間でのトラブルが発生した。連絡ツールとして使っていた「まなびポケット」への不適切な投稿である。昨年度までは，このような事案が起こると，その指導に躍起となり，反省させることを目的としていた。しかし本年度は，デジタルシティズンシップの考えを基に，児童の学びの機会と捉え，対応する教師の姿があった。次第に児童もタブレット端末を自分たちの判断で活用できるアイテムだと認識し，運動会のスローガン投票をオンラインで行った。気が付くと６年生は，メッセージ機能や動画を使い，運動会の大玉送りについて作戦会議を行っていた。また，バスケットボールワールドカップでの日本代表の活躍で盛り上がると，バスケットボールの名作漫画について，子ども同士で感想を交換する姿も見られた。さらに，低学年でもきれいな虹がかかっていた翌日には，写真とメッセージで自分の感動を伝える場面が見られ，学校全体でタブレット端末を文房具として活用する雰囲気が広がっていった。

②「主体的な学び」～自らの困難に立ち向かう児童の育成～

先進校を視察した多くの教員は，本校が遅れをとっていると危機感をもって帰ってきた。一方で「そんな授業に挑戦したい」という教員もおり，手探りで授業づくりを行った。「まなびポケット」のチャンネル機能を使い，意見交換をすると，これまで発言することに抵抗感があった児童が意欲的に発信する場面が増えてきた。また，発信方法も様々で，ノートにまとめた図や表を写真で送る児童もいた。すべてタブレット端末で処理するのではなく，より伝わりやすい方法を自分で選択する姿に児童の学びに向かう変化を実感した。実践を重ねると次第に児童の中に選択肢ができ，動画を視聴し情報収集したり，友達に質問したり，自分のまとめを発信したり，自分なりに方法手段を選択し，学びを進める姿が見られるようになってきた。



資料１
【意見まとめてみたよ】

③児童の自走～自分たちで変えることができる学校～

本校には，「学校の約束」という５０以上のきまりがあった。児童の実情や時代に合っていないものも含まれており，児童からの不満も聞かれた。そこで，自分たちの手で学校を変えることができると実感する機会となるべく，子どもたちの手で「新しい約束」を作ることとした。その結果，５０以上あった守る項目が１０項目まで減った。話し合いの過程で，「減らした内容は，自分で考え，正しいと思うことを行動しよう」という声が聞かれ，受け身ではない姿に自走への芽生えを感じた。「新しい学校の約束」づくりで，自信と自覚を持った児童たちはさらに運動会に自分たちの考えた種目を取り入れたいと声を上げた。児童会を中心に意見を出し，全校で楽しめる種目をと意見をまとめ，校長室を訪れた。〈資料１〉その他にも，あいさつを盛り上げる「あいさつマン」や「挨拶ソング」の作成など，児童が学校を盛り上げるためのアイデアが教育活動の様々な場面で見られ，まさに自走する子どもたちの姿があった。

活動の成果：

学校内でのトラブルの件数も，昨年度の同時期と比べて，半数以下となり，生徒と教師間のトラブルは１件も起きていない。教師の意識転換から始まった本校の活動は，長年の本校の課題となっていた校内トラブルの解消だけでなく，児童の自走する姿が見られるようになった。そんな児童の姿に刺激を受け，「子どもに聞いてみようか」「やってみようか」と教師側も，ＩＣＴ機器を活用した授業への挑戦や，時代に合わせた宿題の取り組みの実践など，管理職から言われたからでなく，自分が正しいと思う方法で，教育活動に向かう姿勢が見られるようになった。これからも子どもも大人も命を輝かせる幸せを実感できる「地上の楽園」を作っていきたい。

資料２「ぜひ児童会種目を！」

NITS大賞　応募一覧

No.	エントリー名	活動名
1	鹿児島県鹿屋市立大姶良小学校	小中学校9年間を見通した教育活動　～高学年教科担任制の実践を通して～
2	山口県立山口農業高等学校　西市分校	キャリア教育の充実を図る　～地域の教育力を生かして～
3	愛媛県砥部町立麻生幼稚園	地域とのつながりの中で幼児が育つ　地域連携の見直しと工夫
4	宮城県立金成支援学校	「レッツ　トライ　ワーク」　生徒の自主性を高める指導の工夫を通して
5	武井恒（現:甲府市立国母小学校）前:山梨県立かえで支援学校	教師の好きと強みを共有する取組　専門性を発掘、活用する人材活用バンクの提案
6	福島県郡山市立宮城中学校	「小規模校の良さを活かす教育実践」　小中連携協働実践を中心に
7	広島県呉三津田高等学校	「みんなが主役」の学校へ　固定観念にとらわれない学びの創出
8	伊丹市立摂陽小学校　事務職員 大嵩 貴史	事務職員の主体的な校務運営参画　学校運営協議会と共に創る「チーム学校」
9	西宮市立甲陽園小学校	「あいスタイル」が学校を救う!　独自の教科担任制から見えた学校づくり
10	鹿児島県鹿屋市立寿小学校	よりよい自分へ!寿キャリアプラン　キャリア教育の視点に立った学校改革
11	垂水市立新城小学校	ICT利活用による学校の活性化　新城らしいGIGAスクールを通して
12	京都市立北総合支援学校　研究推進委員会	ウェルビーイングな学校づくり　子ども・学校・地域社会が協働する実践から
13	志方 大悟	学校を動かす初任者研修　初任者だって学校をマネジメントできる
14	倶知安町立倶知安小学校	全授業の改善を柱とした学校力向上　倶小プランで創る楽しい教室よい学校
15	京都府立中丹支援学校　長内 修平	夢があるから強くなる　～フットサルを通じて～
16	南種子町立南種子中学校	子どもの学びと教師の学びは相似形　子どもの学びを通した授業研究法の改革
17	厚木市立毛利台小学校	ハッピーフィードバック大作戦!!　若手育成!いいところ見つけで教師力アップ
18	岡山市立芳明小学校	体育革命で働き方改革　～カリキュラム刷新と体育専科導入で～
19	高知県立高知国際高等学校	異才を育てる学年縦割りゼミ探究　学校全体で取り組む「総合的な探究の時間」
20	関市立小金田中学校	みんなの自己肯定感を高めたい!　働きがいと自己有用感を核とした働き方改革
21	大分県別府市立中部中学校 校長　佐藤 裕一	生徒・教師・地域が夢を描けるDS　若手教師がめざめた瞬間「WBC夢の実現」
22	京都市立向島東中学校　夢現プロジェクト	生徒も教職員もHIGASHI愛!　夢中になって真の働き方改革に挑む学校
23	高崎市立箕郷中学校	チーム箕郷で不登校対策いじめ防止　PBISとスリンプル・プログラムの活用
24	沖縄県 那覇市立城北中学校	デジタル・シティズンシップの醸成　学校全体の対話によるガイドラインの創造
25	大阪府立枚岡樟風高等学校	定期考査ってほんまに要るん?　明日が待ち遠しい学校にしていこうや!
26	福井県　美浜町立美浜東小学校	いきる力育成＋20プロジェクト　アントレプレナーシップ教育小学校モデル
27	鹿児島県徳之島町立花徳小学校	児童と教職員による花徳DX　未来社会に生きる児童に必要な力を育成する
28	横浜市立岡村小学校	全員参加の校務分掌　やりがいを生む学校運営組織『C研』
29	北海道岩見沢市立明成中学校	カリマネで明成みんなのハッピーを　令和の全員主役型カリキュラムマネジメント
30	鹿児島県出水市立野田小学校教務部研修係	語彙力を育む学習指導の在り方
31	鹿児島県出水市立野田小学校学校運営協議会	郷土の魅力を味わう野田っ子の育成　学校運営協議会の挑戦
32	鹿児島県霧島市立国分南中学校　教務主任　大重 嘉孝	5Cで挑戦!魅力ある学校づくり　通いたい・通わせたい・勤めたい学校に!
33	赤川峰大（神戸大学附属小学校）	異年齢集団を軸にした学校づくり　人との”かかわり”で人を育む教育への挑戦
34	豊橋市立小中学校5ブロック共同学校事務室　主任 細井 雄太	マニュアルのユニバーサルデザイン　短い説明動画でタブレットのトラブル解決
35	滋賀県日野町立桜谷小学校	喜びと充実感を味わえる学校づくり　校内研究の改善と、互いの良さ認め合う取組
36	武雄市立東川登小学校　事務主任 山口 祐美	地域とともに学び続ける学校　教育行政職員が活躍するチーム学校のあり方
37	浜松市立西気賀小学校	「全校31名複式小規模校」の挑戦　精選+「少人数×ICT活用」で深い学び
38	岐阜県岐阜市立境川中学校　小池 正人	生徒の充実感を高める学校づくり　自主性・協働性を高める研修デザイン通して
39	秋田県立仁賀保高等学校　冨樫 真雄	組織で取り組む教育活動最適化計画　特色ある活動を推進するためのプロセス
40	京都府　向日市立第6向陽小学校　岸本 啓司	「研修観の転換」への挑戦　校内研修を通して教師の主体性を高める
41	熊本県芦北町立佐敷小学校　教諭 吉永 史斗	学校と地域で「がっちり!」　地域とともにある学校を目指して

No.	エントリー名	活動名
42	東京都世田谷区立駒繋小学校	みんなが繋がる校内研究・校内研修　授業改善×タブレット端末
43	宮城県柴田高等学校	柴田高校 Update !!　「生徒のための持続可能な空間」を目指して
44	鹿児島県志布志市立野神小学校	思いや考えを伝え合える児童の育成　国語科「読むこと」の言語活動を通して
45	志布志市立伊﨑田学園伊﨑田小学校	シン・伊﨑田学園構想　心ときめくコミュニティスクール・イサキダ
46	神奈川県立茅ケ崎西浜高等学校	プログラミング教育　論理的思考力の獲得と課題解決能力の育成
47	鹿児島県立南方小学校	保健教育で目指す立派な健康名人　「保健教育推進シート」でつながる学び
48	熊本市立五霊中学校	五霊中学校「寄り添い隊」の軌跡　不登校解消をめざした生徒の主体的な活動
49	市立札幌豊明高等支援学校	ウェルビーイングの根っこを育てる　「3つの価値」を中心にした学校づくり
50	宮城県小牛田農林高等学校　鈴木 崇之	校内外との協働で魅力ある学校へ　学科や地域の特色を活かしたカリマネの実践
51	山口県立山口高等学校	保健委員が主体の「山高健康の日」　現代的健康課題を解決するために
52	愛知県名古屋市立高坂小学校	教員のウェルビーイングを育む　対話で「知りたい」と「教えたい」を繋ぐ
53	新潟市立白新中学校	生徒が輝くブカツイノベーション　生徒自らがデザインする放課後活動の創造
54	川崎市立柿生小学校　校長 杉本 眞智子/教務主任 植田 基之	オール柿生のウェルビーイング　全ての人が幸福感・達成感を味わう学校経営
55	千葉県高等学校教育研究会　商業部会	「千葉ふるさと物産」の作成　探究学習の指導力向上に向けて
56	NPO法人xTReeE（クロスツリー）・NPO法人JAE（ジャイー）実践:大阪市立白鷺中学校	「対話の力で自己肯定感を高める」　グループワークと専門家との1on1の効果
57	長野県御代田町立御代田中学校　中村 仁美	生徒が主体的に取り組む生徒会活動　～生徒の声を軸にして意思決定する～
58	北海道伊達高等養護学校	藍で繋がる伊達愛プロジェクト　地学協働による文化伝承と藍を通した交流
59	弘前大学教育学部附属小学校　八嶋 孝幸	参画意識アップ、目指せチーム附属　グランドデザイン重点的取組の共創と具現化
60	東大阪市教育委員会 学校教育部 教育センター	「創造し、表現する学び」　ICTを用いて”つくる”を楽しむ
61	神奈川県横浜市立中川西小学校	地域と協働する学校　―社会に開かれた教育課程を目指して―
62	鹿児島県曽於市立光神小学校	未来へのインフォメーション事業　全校10人・特認校の「夢」実現への挑戦
63	福岡市立高木小学校	今こそ、子どもも先生も笑顔に!　～TKGs高木スマイルプロジェクト～
64	百合学院中学校	総合的な学習を利用したOJT　生徒の学ぶ姿からスタートする授業改善
65	愛知県豊橋市立大清水小学校	地上の楽園プロジェクト　みんなで創る。みんなが楽しい学校づくり
66	鹿児島県鹿児島市立錦江台小学校	授業力アップデート!リスキング　主体的に学べる授業研究会を通して
67	熊本市立北部中学校	対話的・協働的にカリマネ改革!　校内研修改革からチーム北部中を目指して
68	和歌山県立紀北支援学校　教諭 中島 慎介（和歌山県教育センター学びの丘　行政研修員）	みんなで共有!デジタル教材!　～☆本のもくじでわかりやすく教材整理～
69	京都府立中丹支援学校	子どもも大人も意識改革　挑戦する40周年
70	九州産業大学造形短期大学部　森下 慎也	ランドセル+αプロジェクト　未来へ繋ぐランドセルの輪
71	静岡市立　清水第八中学校	'働く'を予測・計画する働き方　タイムマネジメントからのアプローチ
72	神奈川県立瀬谷西高等学校（現:神奈川県立横浜瀬谷高等学校）	瀬谷西SDGsプロジェクト　自己肯定感を高める都市の地域課題解決学習
73	那覇市立城岳小学校	子供と共に学びを創る　「城岳小学校学びの相似形」の構築
74	岡崎市立美川中学校　F組	多様性を認め合い子供の心を自由に　「F組」を居場所にして未来を「見る」子供
75	横浜市立義務教育学校緑園学園	義務教育学校での独自教科立ち上げ　表現・未来デザイン科カリキュラムデザイン
76	和歌山県立貴志川高等学校生徒会執行部	生徒の主体性を伸ばす生徒会活動　クラウドサービスを用いたプロジェクト設計
77	高松市立牟礼中学校	Studentセンタード!　～誰もが居心地の良い場所を目指して～
78	福岡市立花畑小学校	指導効率化による本質的働き方改革　指導内容を整えることを通して
79	福岡教育大学附属福岡小学校　主幹教諭 井出 司	充実感でいっぱいのチームへ　成長と働きがいをベースにした校務運営
80	津市立敬和小学校	働き方インクルージョンICT朝活　モーニンGRIDY&ロイロデジタル職員室
81	大阪市立瓜破西小学校	アトリパークでESD!　学校の特色を生かしたカリキュラムづくり

編集後記

本事例集には全国各地から集まった優れた取組が詰め込まれています。それぞれの事例が、地域や学校の特性を活かしつつ、教育をより魅力的なものにしていました。読者の皆様には、この事例集を通じて教育の可能性を感じていただき、自らの教育現場に活かしてほしいと思います。

最後に、この事例集の制作に携わっていただいた全ての方に深く感謝を申し上げます。今後も、よりよい学校づくりに向けて、共に歩んでいきましょう。

独立行政法人教職員支援機構　NITS大賞担当一同

トピックス

NITS のウェブサイトの“トピックス”に掲載された内容について、ご紹介します！

- 新規動画教材
- 講師コラム掲載
- 実施事業に関するニュース…等

研修紹介

NITS では、年間 30 種類以上の研修やセミナーが行われています。研修期間中、内容や様子について紹介します！

学びの共有

研修参加者の感想や印象に残った講師の一言などを紹介します！（予定）

つぶやき

理事長の荒瀬や NITS 職員が感じていることや発信したいことをポストします（予定）

届けたいものが、たくさんあるから ——

公式 SNS

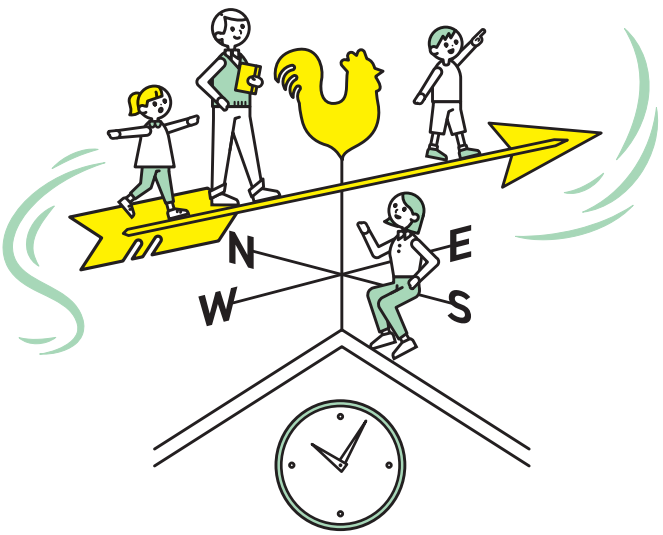
X 始めました

https://twitter.com/NITS_official

その実践は、
新たな学び合いの風を吹かす

第8回NITS大賞
大募集

「NITS大賞は、独立行政法人教職員支援機構（NITS・ニッツ）が、学校をとりまく課題の解決に向けて実践したチーム学校の取組を広く募集し、表彰・公開することにより、教育の現場に優れた取組を普及していく事業です。



応募期間 令和6年9月1日（日）～11月8日（金） 必着

主題
子供一人一人が輝ける場となるように～教師の働きがいを再構築する学校づくり～

エントリー要件
学習指導要領の着実な実施、学校における業務改善への取組、ポストコロナ時代の新たな学びの実現、特色ある学校づくりなど、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現に向けて、多様な人々との協働を含め、のびのびと楽しく誇りを持って学校改善に取り組んだ実践活動を実施していること
（令和6年度または同年度を含む期間に取り組んだ実践活動）

エントリー資格
「エントリー要件」に示す実践活動に主体的に参画した個人または団体
（教職員、児童生徒、保護者、地域の方（学校運営協議会を含む）、及びその関係団体）
※個人がエントリーする場合、または学校以外の団体等がエントリーする場合は、必ず当該学校長の許可を得てください。

審査方法
一次審査：エントリーシートをもとに書類審査
二次審査：プレゼンテーション審査

表彰
大賞（表彰状、賞金30万円を授与）、準大賞（表彰状、賞金10万円を授与）、
優秀賞（表彰状、賞金5万円を授与）、入選（表彰状、賞金2万円を授与）等を選出

提出方法
［エントリーシート（A3用紙片面1枚）と連絡先シート（A4用紙片面1枚）を提出期限内に送信してください。
送信先アドレス：award@ml.nits.go.jp（エムエル）］

エントリーの宛先 お問い合わせ先	独立行政法人教職員支援機構　研修推進課 〒305-0802　茨城県つくば市立原3番地 Mail:award@ml.nits.go.jp　Tel:029-879-6638

第8回NITS大賞
募集案内

第7回NITS大賞
事例集

第7回NITS大賞
受賞者一覧、活動発表動画